

七部波心錄
 炭俵 六

^ 5
 4530
 3





門 へ 5
 號 4530
 卷 3

昭和十一年
 三月十日
 梅小

七部伎心録巻

曲齋 注

○炭俵集

世中茶集の凡調流を注し

炭俵は抄抄利牛孤存三子の撰之之縁に
 社をより同七の友とてありぬ(同書)許去
 曰抄抄利牛孤存世中抄抄流より旧條の
 序と炭俵は改條の輕き所と云ふなり
 は集の一作たるやあ白の蒙方執向の九方
 只平生より力と端一白作らさと撰集の
 秘と用寸只云味の中の味と云うて撰
 きりたりと云ふ其ありきるなり三子ま
 たり晋子の厨は別處で庖丁は撰これ
 祖翁より先と頗あいて加減やきき
 精進は風味あれ常の人れありは
 只後よりと云ふは撰集の風味あり
 どもいふからしき其表を考ふなり



神風やいせの海は網引或は五園の菓とよせ
或は後林の藝とあはれ先庭室天和比の
麟鳳が献きよりを此日の程去れ日乃
程と作りあはれをいさるひさことあは
む事程との千の如く変化の次くを程
さて其人とて其調味とす一昔より
は其後と後まほ似一人の志と入るまた
田舎菜は勝をさるる程とて其色乃
其のさすも似これ風味はおんも似るへく
もあつたふや程後後後後後後後後後
この後集は其集の徳林再ありてあるれ
此後の原仙傳は云程義在世三余年拾上
くも系ゆ程風雅と初まよりいける人
為古きを志さるるあは異件の句とて志
致りり初より殊立古氏文格の格を
奔りし後林宗因の流りを出今は系

筋之乱さるる學者古今不易とある
原一はり終るは今世の人々の祖籍二世の
変化がたき寸只は二集は意味を其
一遠て此世はあまよ止るおと定なる程
まの身は二体よりそのの似るおと固
きて初きるは茶風集なるはあつて造
化よりくるるのふ角なるれいありいそみ
かゝる旅くも苦くも母くも幸くも初ふ
夕あまふを用いおとやも人々川原の
年英の程き一生と昔のくあはる志を
ひのちて遠くおの止さるてく日く乃
流りをんをあし初る意は撰術の二宮ま
んとしし居るるよあは

一
梅香は花と目の出山路は 花

此後考をさるる山の向うのくと加のあけ

さき梅の句は多る去の陽気は山崎ゆく人の
のけ方より勝る風情なり 田がは女おの他は
呉あつとさ守辞之梅香とらふ時余のむ
の香枝及ぬん梅の身とす所余の香を向
は直さく梅は花て香をいふとのちあはり
後旭梅の旭余きあふとやするま何世も
いよはとやまされし 支考の余きは白の寂を
又あて余情といふと白の寝る小枝の夜より
は白旭の梅くは誘れ出とく作るふ世を
因吉注は影略又只水といふなり

とまろくくは雛子の啼るる 世故
余白曲曲の山崎と又はす件又支考梅の無
と依るるやと雛の啼るるよのつと日の出る
りきよアトケむきささくう若後たたの山
まくは雛の啼るる声ききよは寝て同じに
ま件之田舎者ききをの行山すは雛あけ件は

○**春** 山崎の字はくの字やと先まよあけ件は後
白の秋**園** 春白は時分梅あ。あは時をせり
定くはは梅あさる雛法をのつとあ

■ **春** 春法を去の春透はれけ
あふアキスルはくは雛の啼るるルレテ村は雛あは
たはえささるおとけり 家考法を去の春透
はれけり二月は田家原ある時あわさあ
らよあさする件くくと木は伐るまは雛あさ
あくとすて雛も啼るあもち春透のまはさ
も雛初の芽をもうと無するはく

□ 上の使ふあくる春は世 菊
あ白あ考法を去の春透はれけり 野史集
スル件とえさ思遠の事せたり 上の使ふあ
る春の世は今もいふも母し原もあつと考法
始りす時のお上方あ果よは成て又あ考法
をむあさるははきき春透考法は云と

哲人を又合らるる石部金まの持丸あはむ
○固下るとせし死句は百の法陣あひの善法
する人費込采の上を交て仕合よき体はハ
換急とまらむ何の並上りもようじ

● 音のちちちとせし月の雲 霜

雲の上のしきり使は上る采の並まり体と人志
状とく心守指さたり音のちちとくと世
月の雲上げまぬとら上方に用らる大障
とあれとちちちとせし日音まらとて晴ら
依り方のあら一向空ぬおと心守指く○固
根のききとてとらとせしは陣陣陣とら
まらとせし指は押急と上方のちちとくは方
まらとせし又は方の陣はとらとせしは
○ 敷敷心は秋乃さしき ち
雲の上ちちとくは木葉とあはる程あはる
静と休とせし外出せ指さたり敷敷心守

秋のききと外出せとせし月の雲晴れ出次
ちと葉あとおし敷敷心も外に出たて
とらと敷されと心守指く○固在下のちあき
指はるはく

山次へ葉葉とく迷或心さ

固ある敷敷心守きを春町の峠とせし敷敷の
許は心守心とせしなり 雲の上心守とあ
は心の心とせしはは成て一向分りよあ心守
は秋の峠きと不熟心の心とせしは○檢足田
の橋のたの命あはる橋川同士の心守とせし
て敷敷心も空らとらま

□ 娘とせし人よあせせぬ 霜

雲の上お改と葉葉の使来て自切むとらと
迷或る体とせしは防の指さたり娘とせし
人よあせせぬ 秘恋娘の葉はあはるは
あは葉相あれは使の好き敷あはる自さ

■ ひことと云出守お代長の子 為
 秀白川向の持宅へ移るゝこそたれまよる侍ト
 又此こそ食するは内分なり候とこのまじ
 い持亡事分心に十九の暮きじと兄先吐よ
 献立するは控て味房いゝせじとやんれいせ
 連てお袋病中の侍は務の直なる死因を
 まそちの内下こそ控おれとやんれいせ
 子育守お秀より候て控おれとやんれいせ
 何ヶ何より候と人ちや今とてア人但で
 おて候て候まを候とて候とて候とて候とて
 侍の申す事出で候と控と因後宮名目母
 を侍は治るる中腹中ま女子のあり候時侍
 の中はおあるとて候れいせとて候とて候とて
 中侍の侍り○譯註さへ候とて候とて候とて
 □ 秋もすゝ尼の持病を押しりる 也
 秀白川隔てお侍の申すひことと云出守もまよ

侍と云まよは候との用と行なり候と尼の持
 病と押しりるは娘急考の尼は侍れて頼恩清
 侍する船中あり私にお侍も候とて候とて
 接馴てをれい何のまよも候とて候とて今
 秀の持病まよおれと母も持病急考と
 とれをり候と秋考とて候とて候とて候とて
 固接して秀と候と急考の人まよとて候とて
 ■ こんまよくをり候とて候とて候とて 為
 秀白川隔て候と尼の持病と押しり候と
 侍と云まよ候と娘急考とて候とて候とて
 り候とて候とて候とて候とて候とて候とて
 まよ女房の候急考とて候とて候とて候とて
 使文れいと候とて候とて候とて候とて候とて
 るとて候とて候とて候とて候とて候とて候とて
 それとて候とて候とて候とて候とて候とて候とて
 昔年定財完めち候とて候とて候とて候とて候とて

等して敷献汲ぬるおとすに我まよきの
後乃よまへんやうさふことしる程之固曉
をくはせを取らむ共れう ○譯人ハ月
又てはのいよ夕抱日月も又寸共二程之

○ 初丁は葉を下地敷てん。

▲あひ長春て二入まやくもく狩る伴上之
程さる程を付たり初丁は葉を下地敷てん
暇乞のゆかり者さうおろ初丁のほる声
は程て宣んくもウセツあれい程さるか
あまちじと葉を下地敷てん ○固狩は
お出を移す共れ也

● 葉を敷て居合一抜

▲あひ初丁は初名三ツ葉を下地敷てん
は白とえは文柄の葉を付たり葉を下地
小柄の江戸をさむ送あま東る葉者乃
己ま葉を敷むとちさくせ刀のおま

るは街中の歯磨き美は似たりと評しれい
一抜お目よむと葉を入て庭の草木をむ
おちよま葉をさくと葉をさう一抜の紋付
しるは葉を敷人よむ寸葉を敷人よ居合
ちて生葉法大怪秋と各お葉を敷
○譯人乃中の葉を敷る葉を敷人よ居合
伴は固供の初下割程之は後白の或因
葉を敷て主人ハ後ろ血気の葉者
松之枝目を抜く伴モ挿糸

● 町尻のほろりと破てむの葉

▲あひあまお人葉を敷る葉の居合抜ト又
木陰の又お人を付たり△居合抜の句と主人
合とては活あれと主人居合を實の居合
又る活あれいからあま又る人の二方
情を付て葉を敷人葉を敷る葉者一
と送る伴ト又ち人ちもへり一抜葉のむ

隠上六 殊少き人子幼妻する哀ある故又
之一抜は祀も存仕はどの故も記述せむ

□ 門で押さく壬生乃念佛 為

▲お白系町元の結構サハケリと碇て花の蔭
ノを奈ヤニハルルは祀と又之又と愛はむ在り
せけり門で押さく壬生の念仏ハねえ果
て町人元棧あう下て奈店ニ休あの中と
ちえせり人々の大勢は押れて方内とああ
本門のあう天窓をう又えて出果ぬと後
出る人の向と又たたの奈店ニ奈店あと言
つせがれあう故の固在ふ夫の棧あう
らやむ件ハ傍遠也

■ 大鳥は未知のいざれと吹口

▲お白ウラ乃モ手門で押さく壬生の念仏同行は
初と又之又は碇の用をせりまぢ風まよえの
いざれと吹口ハ本寺の念仏果て乾の小門

より狭き橋の上と押れきて千中通と少熱
ハ西院辺の回り終日本寺の依香は殊一
真と心なる木の打奈の喚は現れてコレヤ
辰も念仏も一不よめこアははち奈もせず
碇せあうす。門あのおいあてあると打碇
ゆる故ハ本寺と大会仏あり小の方ふね
云をあり中屋ふを奈やあり念仏尺去西
其外と表あうる奈店多々奈店も伝ん
碇説あり本門ハ東南も乾も門あり
出口よりて碇せり。固三百ふは似れ
念仏の用ハ固奈奈桶碇て相やく碇モ
地ハ不案内のぼと

□ 只あまきり 碇口はくし

▲お白相打時分人皆也よ出てあえお働く侍
を病て乳とむ人をせり只あまきり碇
碇ハ碇を碇して碇は相碇め改碇も

吳又と加一親と定て所成せとてするは成一
といはれり。所成の名はあれは昔田をさすむと
田をてけむ成理。発せしむとて送るおろく
又いまた。信人とあつておろくはと△又字死
と信は終り。○國口只医おる作は終く
□ あそてさ下りてま夏の出来 才
▲あつ山は信下の所成と配下百姓へ送るむ盛
上又は及乃命の宗命と行なりあそてさ下
てま夏の出来まると今今と何所のま作
もやとておろく送る終く

● この字も車の方よ意とぬ

▲あつ出来まると所成の地と又は及村の宗命と
行なり△只畑中の様は母一まはるお羅手
上又は△意ははる只種は出て一通成の元
よ夏の出来とさく一丸種を山とあるとある
白い名と含て又さる中定はと

■ 眞子喰あく候の雑炊 義

▲あつ南向はまると宮家よ来意知するま所
の件と又は及村方の用と行なり眞子喰あく候の
雑炊と候なり。但おお後一も喰て各候は
出る扱へ合はくとささく船中も御家の眞
子喰と賣物賣財切をてりて是常の雑
炊用と又あつあぬ雑炊多き候は肉はあま
作て雑炊も用と。○固候村と又さあく付
の細とさる雑一は終り。○國口人の浦席
田一は終り喰と後と後と後と後と後と

□ 尙あく一扱くはさうあり 才

▲あつ矣雑炊とさる冬月所候は席と接替
の喰他。件と又は及村方の親と行なり尙あく
一扱くはさうあり。△候村はあれ束てさこ
りする氣をさあむ利急の衣は爲く黄喰を
引く否とさる候は夜食は懐くさ始衰と

固衣為きんはハヤ

□ 来進の言に里果ぬ異用

▲前の一振くは毎振起居て字と名を以てする
件ト云ふお記の用と行ふ来進の言に里果
ぬ異用ハ川千を以てする何屋よ言ふ極り
る村長の宅之石畑法下役集て毎晩異
用すれと約らぬとを雅座村初め人の言
ぬるきめ又てる姓と傍とと出く女子振く
固里ぬの借あつた結ハハヤ ○固来進は
母子ハハヤ

□ 隔しもあま守嫁を連れて来て

▲前も来進の姓のお結し件ト云ふ言を以てす
き用と行ふ隔しもあま守嫁を連れて来てハ
男う腹積つて作らぬ守と嫁連れて戻れとア
固来進守と云ふ手傳人うておとらお代取
振く思ふと昔と云ふと振く○固ヤハハヤ

肘の懐にむたぬれむ嫁の言葉ハ振るぬ
屏進小水位のお結ハハヤ

■ 屏風の張ふ人あま守子盆

▲前も白扇の人の我もあま守嫁れては初ト人
を振手てて隔し振と行ふ屏風の張ふ人
あま守子盆ハおあ扇のお結ハハヤ
あま守子盆もてて嫁の笑声もア之を以て
も初夜屏あねと向く挨拶せぬと云ふも
致して戻らぬれと云ふとあま守子や
と鳴らす振く ○固あま守と振る振ハ屏進
あま守子と初夜するを以て人の何と云ふと歌
又ハハヤ 固来進ハ二句意ハハヤ 固来進ハハヤ
るのあま守子毒一信けきおとら仕換あ
るあま守子毒一世人は儀中のお束おと
浮すらぬと改てて白くははぬぬ

三

菜母も菜織りり花成道 露雲
 菜母寸も菜中は菜物 民家の権門をへ
 良縁の白く昔菜母娘の産むきい娘のふみと
 阿弥世も菜織て娘の實い世このおあす
 初より天王寺の寂室に於むる今松丸連て托
 許すきとさとも菜織の名も昔 業あひひは手
 隠居の菜母も女教あむとれを寸拵之 〇菜
 菜母のあすのくさるる空遠くを白い足あを捕て
 りあそ 〇菜織菜母のトキ炭俵くもとあり
 ち菜織の意は 証とてもあつてもも織も寸拵
 菜織や首より菜織 〇 利牛
 本白菜好白比のむも昔を思て菜織 〇 利牛
 感する体ト又立世畑の飯を食たり菜織や首
 菜織りりハ名もた巴口を糊するは傍て
 世よすむ人の情もたあつむやをも 福添の娘

菜織の首菜織の廣菜母は子貴卵
 菜織は行るるを菜の味て子と何をいり言
 菜は白き卵ある形菜織成るるとも 又あれは
 〇百ち又よ空もうは 福添名おの菜織ト
 又さう菜と菜小福菜 又菜も菜好ま用か
 ● 行乃の妻の小板のたまりて 抄を
 菜の菜や首とあく焼く件ト又立言菜板
 の行乃の乾て菜伸くる拵を行く 〇白板之
 あれあ 菜の菜首の菜は菜の菜織も
 体ト又立 〇あトま 〇確きれぬ百の菜トヤ
 〇菜トヤ 〇固行客の遠運兵 〇菜トヤ

〇 介をさきま 〇 園子角力拵 〇 高
 菜の板乃と大勢 〇 菜トヤ 〇 又お拵を
 行乃の介をさきま 〇 園子角力拵ト 〇 田舎の
 菜娘の菜ト拵ト 〇 又立 〇 菜トヤ 〇 知方り屋守 〇 菜
 〇 菜の情強る角力拵トセハ行乃と子 〇 菜トヤ

此を扱きて仕務すと古来の様情で縁敷
は喜ぬじしと主人の良人付て教の書も表
と守勢及てん脈あるア如き老と皆らむと
きめし守初出んのきき苦くむと人きふ
う人の心とてしむる扱く

■ 抱上るはれ小使とする。 是

▲ 抱上るはれ苦の苦は是の水司女
上とて是は抱上の用せたり抱上る子の小使
とするは徳の尻を扱て拭ひ子の尻を扱て拭
て何もあふ教でせれとあつて又つては七
年の老も是の苦も是の苦も扱く○固濁
是は抱上る水司は持守は苦き老を治す
り只此の心苦きをくくしてあれ

■ 抱上るはれ小使とする。 是

▲ 抱上るはれ苦の苦は是の水司女
上とて是は抱上の用せたり抱上る子の小使
とするは徳の尻を扱て拭ひ子の尻を扱て拭
て何もあふ教でせれとあつて又つては七
年の老も是の苦も是の苦も扱く○固濁
是は抱上る水司は持守は苦き老を治す
り只此の心苦きをくくしてあれ

送るは何正も送るの束の末の口とて
これの内より送るは口とて抱入る扱く因三万
因捨河内大久保村とて始て徳と伝るとあれ
は為治あむしり固抱のく扱の運付は

■ 抱上るはれ小使とする。 是

▲ 抱上るはれ苦の苦は是の水司女
上とて是は抱上の用せたり抱上る子の小使
とするは徳の尻を扱て拭ひ子の尻を扱て拭
て何もあふ教でせれとあつて又つては七
年の老も是の苦も是の苦も扱く○固濁
是は抱上る水司は持守は苦き老を治す
り只此の心苦きをくくしてあれ

■ 抱上るはれ小使とする。 是

▲ 抱上るはれ苦の苦は是の水司女
上とて是は抱上の用せたり抱上る子の小使
とするは徳の尻を扱て拭ひ子の尻を扱て拭
て何もあふ教でせれとあつて又つては七
年の老も是の苦も是の苦も扱く○固濁
是は抱上る水司は持守は苦き老を治す
り只此の心苦きをくくしてあれ

■ 赤松社徳い跡守風吹信 七

赤松は奥隈のふち併に三階より作し又五尺
坊の指をたより赤松のちい跡守風の吹信は
は方の赤松の奥人よま吹信されまよその赤
松の信やう小ちまむううすく川くまの赤松守
とあまの指の吹信の自己信は赤松の自然ま
て初合されい信は一政

□ 三坊の信は赤松守月信 五
赤松赤松の徳い風の吹信は赤松の赤松
は初とえま又由をたより三坊の信は赤松の
ますし月よま赤松守大勢の信は赤松の信
は初とえま又由をたより三坊の信は赤松の
めま赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信

■ 赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信

○ 今よ赤松守の口を初り守 七
固赤松守百姓知赤松守人の出世し又赤松守の出入ち
かき指をたより赤松守人の出世し又赤松守の出入ち
かき指をたより赤松守人の出世し又赤松守の出入ち
かき指をたより赤松守人の出世し又赤松守の出入ち
かき指をたより赤松守人の出世し又赤松守の出入ち

■ 赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信

赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信
赤松守月よま赤松守大勢の信は赤松の信

を招てお後するも金に形もな否やも實むも
實りするもはるあきまはたきんこれいから
証い又おき証を求め証返し和漢唱てお
おしごつと実せてお後と実やするお別
くる商人の○固り熟するを待てまゝいんあ
と紙の舞酌は托おりくはは証い

○ ひくひく〜と書か隠せ〜 牛
書白妻人々々おらまき妻てゆじとんせ
件とえ言私事件を行ふ何れも行て余拙
書い仏具店こつて飛書し件とえさる外
は書方おれ証向は実と入口証書の和書
ま似るおはく〜お〜お〜とえまは証少
き白の証向は又するも中定法と

○ 種念社使書せまき〜 牛
書白隠書書まは証あ〜あ〜と書件と
を文用を行ふ種念の使書せまき〜と

今社あるよつてまよと小丁推はヤ行る振と

■ か〜と証書れぬ御引 書
書白種念使書まよと書の送高とえ書
は証書の用を行ふか〜と書の書れぬ御引
一人固るお推せて御引と書れぬ御引
貸失〜と証書れぬ御引

○ 一人ある母とあて花紙張 牛
書白書あ〜る御引さ書件とえ書とえと行
〜と又御引の用は書〜と書一人ある母と
も書は不用と書書御引と書〜と書と書と
〜と書〜と書件とえ書〜と書のお後まよある〜
〜と書〜と書れぬ御引と書

○ 中〜と書〜と書正月に証書 牛
書白隠書〜と書〜と書母とあて書件とえ書
〜と書〜と書〜と書正月の証書〜と書
〜と書〜と書〜と書〜と書〜と書

残り之園お月の暖ある由の感ありし。
此處を園の接人共の言に

□ そんなと歌題は秋夜中、利は
▲おの上法亭ちんと用おてや人の通る道
て杉蔭を待て金更門の指をたよりそつと
歌くよはの言中よはあくおるおて東の令
門口より杉蔭よま家内旅れい何あうと
歌えよは盛あれい遠入る二の足踏て客
の声を何と振之。○歌題は秋よ下改じ
固辞ある言まわら共自他遠隔二万の内
よ志めく必声するをさう是こそ歌くよは後白
或園ある朝よ雨舎せりよ共接の位也

■ お保よは位も保ておぬ方の月 宿
▲おのハレテ位はあうそつと歌くよはの言
中よはとえま今保一人の何と振をけりり保
てよは位も保ておぬ方の月よ八園温泉の宿

あむお客お言月又の言まする言外より
保てるんよは位この保てよは位も保て居るを
彼方よは必声するつとわてそと歌くよは二往
よ奉りる保てり今保一人の言方より歌
店迄よは保れあむそつと歌くよは振
つとさうけ保運けん。○園言る言保の件
言無保歌く上戸共接系固お言保保れ
てあうく七夕比共後白或園園更指をあき守
然と保不ああう月又て保てよは又位也

□ そんなりと保の秋風 庭
言も保ておぬ言まうき保異よ涼あうく
男方の言まうと又さ不附の言ま分行りて
りと保の秋風よ曲長あう言ま言の言方
よとく保てるよ二万言はあれい何すき言
不保る言ま言も保てを言の独出て保
押あう言方わう大園の破保言うと保く

又五日後の報を行へり信都の許先文也や
るハ都く宮仕は出る所殊に縁あてよん
下り好まざるくをお返の事と云はれ
孝弟の事守伯父坊の信都より合はし
とありん云えし告じと文老守報しりよん
不守報して方もよき老又て信都を對し
先字よまを合しり ○同國久く縁付ぬ妹
意の好まぬも其れお返完る燒き守伯父の
信都くあす共持處之縁付ぬ併りよこまあり
や國久縁付ぬ二りよき皇弟也

● 風細う 秋好鳥の啼はり 水
● 春白文へモヤトキ手通好信都の許先文也や
る併て五日後の報を行へり風細う秋好鳥の
啼はり通好の事さる横川へ小念の秋何の併
より余後あれと秋好は支はさるれとい
使信報すれ縁のち漸好れいよと出也

く報しり同國太曆云貞和正月九日
頓阿結庵小倉山下毎月九日催秘
會兼子母淨辨慶運良式た典殿往生
院別當等也同五年正月九日吉
田神宮寺焼失依之兼好登横川住
且崇院同九八日被任権僧都兼母
再三辭之難 ○同先といふと先の使と云り
只持處之先よ何れもある始よいさるそ
□ 家社縁く 江を又よく 牛
固る白吹り所法り風細う秋好鳥の啼はり
白と云はれしにて出る用を對しり同國家の家
と江を又よくよ九月五日夜降降き川と
法ありて切こま控されあま家縁くるとん
細き信守郎つとる方名辨もあく風之法
れいんさる又あより又よく報しり
□ 泥糲汁 蒸ん老より能ありて 菊

素乃人ユカ又ニ家の處に居たりと云く侍ト又
 立後高の老人と行たり泥船に乘りて去り
 能成てよ五月の度徳田矣も来されい門
 田の泥船れて内むおろし家家の噂して
 又よりむと誘と皆大もよぬると同んせ
 されい已人又て来むとけ十様もさくは
 されいし出の喰おとほきこと信すは
 ○固二百一素乃人連立也くは欄乃欄の
 店そ各食ふは皆信也くは本とやうと誘たり
 □ 素乃人賞品を下して去出守 屋
 素乃泥船け店に居る人老より能成ては向と
 又立昇利田の船をけたり素乃の賞品を下
 て去出守は素乃の屋敷にむけり高を
 助りて侍はたは仕切田のむ船に欄老切
 商人共九し

○ けまらざるやう花の静あり 牛

素乃の賞品を下してうの世上素乃の
 又立昇利田の船をけたり素乃の賞品を下
 全下素乃の素乃と云く死おあるよは作も迂
 素乃の賞品を下してうの世上素乃の
 けく船老しとるむの去よははあつりの素乃の
 大極く船店出の賞品素乃下る船と去む
 ■ 枯柳を今よをりして 水
 素乃の船はれむむと云く船好ト又立昇利田の船
 けたり枯柳を今よをりしてよまきの去き
 枯柳をむむの船面白くしを更柳枯てむ
 雲やけたりと船を船に固きうおは彼と
 けくはハナキ欄モヨ
 ■ 雪は吹く元しとる船月 屋
 素乃枯柳大を今よ上又立余その船をけたり
 け雪の吹く元しとる船月よ川岸に積り素乃
 素乃は吹く元しとる船をけたりもらふもさき

深山の吹元でゐる。傍で枯木の葉が
きざねる。極よけて懐く。月も影よと哀
しく固おまをれて思出る。体は接衆。月後
旅は趣向あり。只月と出せり。只あまき。

■ 南園九けてお忍あたる 篇

▲ 秀白雪社と定法寺。吹元（下井ル）のお不
ろ月と金。国然の指さたり。南園九けて
お忍あたる。思ふ来。お忍依り。言隠り。れ
海流の怪ぬる。とす。海。其之。病の。是。法。と
眺て。海流。を。れ。を。傳。あ。ぬ。男。を。恨。く。操。衆
と。る。月。子。ん。便。あ。く。お。忍。の。手。指。く。○ 障。目。行。志
は。國。月。を。眺。て。お。忍。を。指。ま。さ。せ。れ。南。園。と。南
ら。ひ。へ。り。接。衆。と。さ。り。さ。り。け。ま。力。仙。の。梅。堂。を
往。く。く。れ。白。夜。之。南。園。又。升。之。を。報。く。り

□ 不届子隣と中社ワうあり 水

▲ 秀白南園九けてお忍を指まき人の意下人志

傍に来る。指さたり。不届子隣と中の意り
等。秋との年う。不彼の関。危のせれ。と。世
と成て。独窓の下。ま。ま。ま。ま。板。底。の。く。足
と。風。流。の。運。分。と。固。は。二。百。う。く。報。く。り

■ ちんち坊主と上あうす 牛

▲ 秀白不届子と中社と中のワう成り。と
て。其。人。と。ひ。ま。き。す。指。さ。たり。ち。ん。ち。坊。主
を。よ。く。あ。う。す。上。隣。の。秋。又。は。坊。主。痛。く。を。情
味。入。て。懐。む。の。始。ま。き。て。尻。押。せ。む。と。す。指。と
又。て。千。金。の。隣。を。ま。き。て。ち。ん。ち。坊。主。と。う。ア。し。マ。ア
は。後。上。う。ら。け。ワ。き。も。お。好。お。田。方。也。と
懐。む。又。は。其。等。る。人。の。又。ま。く。取。り。な。る。指。と

■ ちんち坊主の密は東海堂 篇

▲ 秀白三幸回向れ。と。下。新。坊。と。上。と。守。侍。ト
又。ち。ち。ま。き。ま。の。用。を。せ。たり。ち。ん。ち。坊。主。の。密
は。出。束。の。密。は。生。と。下。八。固。や。と。ま。き。屋。人。の

焚きうす持持せしをおゆきしるおとせと噂
起されてお尋ね持たれぬの汗拭く拙を控
て送出る旅之○固初対面の拙女共持家へ

□ 今の乃よち若れ等とさして是る 居

まの白ムリ止し客と送てノ千極半控る拙
を白と見立客止し内さけり今乃よ
房の石まきさして是るノ客の用所さ
降むとすおろく大書吹しれ勢と止め御時
はれ送出てマアすの乃よ大書持りまて今
乃いあらきおれい今乃よさうんささま
より対主人の拙を控て取てる旅之○固客の
杖まてさうんささけり

□ 今乃よすんことささけりなり 居

まの白ムリ止し客と送てノ千極半控る拙
を白と見立客止し内さけり今乃よ
房の石まきさして是るノ客の用所さ
降むとすおろく大書吹しれ勢と止め御時
はれ送出てマアすの乃よ大書持りまて今
乃いあらきおれい今乃よさうんささま
より対主人の拙を控て取てる旅之○固客の
杖まてさうんささけり

とて村^①をてさす下さうおろく書持れれい
書^②をてさすの乃よとさす持ち来携ふとら出
今乃よめてさす^③は麻^④の乃よもおからむ
とまきせれい人々^⑤を^⑥か立てさうんさ
の送けり固の役す ○固^⑦おまをの乃よ
も併し書持りておろく持家へ

■ 白鳥は祖又の白髪社とさす 水

まの白ムリ止し客と送てノ千極半控る拙
を白と見立客止し内さけり今乃よ
房の石まきさして是るノ客の用所さ
降むとすおろく大書吹しれ勢と止め御時
はれ送出てマアすの乃よ大書持りまて今
乃いあらきおれい今乃よさうんささま
より対主人の拙を控て取てる旅之○固客の
杖まてさうんささけり

■ 伝説ありぬ柳城の思ふ 牛

まの白ムリ止し客と送てノ千極半控る拙
を白と見立客止し内さけり今乃よ
房の石まきさして是るノ客の用所さ
降むとすおろく大書吹しれ勢と止め御時
はれ送出てマアすの乃よ大書持りまて今
乃いあらきおれい今乃よさうんささま
より対主人の拙を控て取てる旅之○固客の
杖まてさうんささけり

あつたてを遊人の記をたすけははるの連
も為さしモチハモこのまのまの九月比の
病も淋き時より深すと有るせんで先は
おがあらうと沢山をおと鼻八百ほどりて
も位も又あつたつと付あつたつと
○固き秋の光景共一規也

○山に根際乃征幽あり 水
▲まるまは八根なりシハはの病の通し申す
為さしは河と又さるる年一規とせり山の
根際の征幽あり病の横切なり入込
くる山根の念仏ちよさうは供吉あて旅
ありしはは征もつと幽まかたりと性争を
あつたつとちの病を長うて用とせり一規
家○万日果て征幽あり一規とせり○固寂
莫となすくはあつたつと性争を長うて用とせり
○根際乃そよく風の吹出す 一規

▲あつたつと山又上るる件ト又おつたつと
つり△は対おつたつとあつたつと一規
味師ト又○世の中い灰とある方の後ろあつたつと
カ又山根乃すまの件ト又○枯草のたつたつと
むとあつたつと山根の傍あつたつと

○晒乃うくよと在さしはる 一規
▲あつたつと風は晴日和えち又坊の指を
分り晒の上よと在さしはる一規
とよ布きしのとて乾拂く空よと在さしはる
はよま次色くぬを合の指を

●花又よと女子をうり連立て 一規
▲あつたつと晒ぢやアし空よと在さしはる
口と晒の件ト又晒を分りむと在さしはる
女子をうり連立てよと在さしはる
の山女中あつたつと指あり一規
めさしはる

○余は草のよ董たんちく 水
▲あむちんは連立て袖を産せり子作之を携
草と分るる△又也抱の用は拙 室の母をの
りは草をよより大携よちてくるまむわい
又△△を産を分らしせ給大和強トあてて○
固句依の志をくよ件用の委ありは母もくうト
余の草はトを合とてくるあむちんの子は
林のさくこ依は志集申こそ携る

百韻

子に裸又もてくれは苗舟 お生
▲まゝに抱ふべき子の又まはひ早きうて家乃
つらおも曲る家の中をそあき程と民の片の始
とそやも抱固鬼勢を懐ひ余信ありて
とハテウともしく恋夜あり○因杜は附合
一々白柳の奇ヲひきてこれヲ携共遊く

●岸に棘乃生白よさく 妙ぞ
▲赤白裸身 秋子とてまよ白まくる件は立其坊
の良無さ付て 存のいそくはま白よさくよ舟
まきやく存の上よむ次の白きとて白虫の
涙笑する抱く△棘ハ形極むのそく五年雪白
美心白き一一名は菫重微に五月む感は林
春実を結り

○ ちあえりお珠を産のゆ出て 孤を
▲あむ裾の棘は候はくは体ト又△山林のほ
也防を分るる 和△八幡鳩形小於壞鳩
遍身初白頂下有蒼黒粒似懸數珠
於頸者常棲山林四時鳴秋月最長
声高亮如言老来玄雨之難馴△施ハ棘
よ不用く寝いま白の活便をむきまいつむ
ま入医老ト又△追子懐を携へ彼の袖羽衣
てトセハ花す懐を登りて一扱羽織を其次の

汗よりそ却て某種屋へゆく方々より
おと後悔するをうらみあむ

■ 与力町よりむら西風 生

▲おの珠敷をの声なきを林の中鴻別馬の上り
又立声なきを人せたり林の中珠敷を
と教する早は珠敷の彼岸まははたすむ杜の
ちなき西の天満宗徳宮かひむ閉き浪む
まちまする人の宮の後の与力町の社をくく
町より西のち町へ向うくおら西風強く
吹れぬとくも夜子入よ西の風は陀の不
よりあくとあくおアレ珠敷をもまき東
とあく口あむあむとくくと時正法縁
儂されて念仏する伝老の指へはは程を極
岸糸の出るち町とく付あむまも教はあれ
旗の指足込めてあむむと表す秋乞の
るをむ付あむとくむと林の西風まはまの

せらるる大よ手柄りり

● 半竹よ桑之の袖たくりよや 在

▲あむ与力町より風吹けり体と立干箱を付
くくく合はるよ力町の愛あ 寝いり大隈あ
妻や口の与力町と立口かきよ鼻も水も
る猫も川とまはさくむ坊と教は定法と

□ ろろそふれてわあ人声 居

固あむたくりよも早女のおをてくれ入る体と
立立又強を付たりろろ強て口めく人声よ
田舎市よあけ入造るる医家へ門口茶
油の捨干するを障子の内より口めき声
すて内美の痕吹出てえ入る指を切す
まぬあむれとおよ強く女のはり

● 若月干葉の茹けつるま 生

▲あむ殿よりあけつるまはく体と立立又坊の教
と付たり若月の干葉の茹けつるまはく

姓のせと夕飯支度の花菜しる桐をこの
際我へ述てそあくあえくる伴さ直平の草
尾の白糸うら坊とのるのんは束て白糸く
まくと初手招く○固飯時共一飯く

□ オケカ後うら檀ちる也

固飯白粥を捧て外用よれそり惣去あう
白よ登り伴え立▲独手よ忙き招き付たり
掃とあとうら又まゆこちる也ハ山の様ち
のこそ招坊一人を男よ納ふも下推も並
役すれい後ちくるるま合を共入おもつき
灯も付むと和馬の寸まおまよ招く合後掃
除は湯の合しは表親の合之ありかり合
のら形容を表きて仍るあよ辞まんとあて
きとて感多し○オケカハオケカト改く

○ ぢぐめきの中で振出す御書懸赤 屋
▲あむをけと後う檀ちる也トナラス人比ル河

とえちち手用を付たりぢぐめきの中でより
出するり布赤ト宮せの掃除する也束て
さう袂をて早の立臥よ木のオを手招く
○此の方と仍るあよあむの移術定らぢぐ
めきのオをて仍む宮を存ト掃人のオを
仍る也○固飯時町へ寄る束後句感く
□ 坊まよあれとやオに平次 牛
▲あむ小巻の生捕を大勢よ入市とより妻ま
すり伴ト又立成人を付たり坊まよあれとやう
に平次よまよりかりつさする生度老あうり
又妻も病も果て僅の世帯を喰そ一人の
節も剥されと托許を面倒り又芳の小巻
加くと流も坊まのあつさ守に平次くと
さう招く○固飯つよさう共あむ換の位どく
■ 松板や矢門くもる裡通 ち
▲あむに平次見ル人ニを比彼ハ坊まよあれと

やをり仁平次上は長アラハワカルはたとアミ
 在ふおの指と付たり松板や矢川へもゆる程
 通下アリ矢川の松板町の程町は振板の着
 板あるなり仁平次宅へ今の名に仁平とヤ
 セともやういふ子もあつた昔の名は子口うとあ
 る程と△矢川へ松板の東に降下は属すんそ
 松板や矢川へ作すまぬは向うの松板より
 西の仁平次を在るまきる人の長束る程と
 風俗文正 南行記松板の矢川といふ人の面白る
 西へア不支肩まよと今程て口の西とあり
 ぬり合へ程程とも振板より此の方より
 してとハおあむむを坊主の仁平次は松板町の
 程程をみて振板下アセ矢川へ下は方より
 おる程をみて人の長束をまよとてハ炭俵
 多りのユ○固不用の地まよし世我のたんは
 程程とてまよとて矢川より守りようむ

□ 吹く 藤もはくき園の扱 屋
 葉白松板やマハツキイ矢川へもゆる通
 ありてはたと全付無を付たり吹く藤も
 つき園の扱は松板より悪通ふ万又乃
 園屋は立つわ川まき扱す付作の扱と
 ○ 固厨子園は誤り固おまをぬる女片扱と
 □ 十二三辨の衣裳乃打扱 出
 固あ白追儼の園扱林市もき風は倍と
 き件とえ△貞粒を付たり十二三弁の衣裳
 の打扱は毎の夜十二三あるた衣の大弁中弁
 お弁改弁あと次と列する中よ余の差扱
 もあるとて扱れもき風を倍て扱と
 け女を思やる扱と十二三弁と倍人扱の
 扱はアえ様は追儼のりき風より客は南
 屋よ上り下も打扱は扱を倍と扱と
 ○ 本寺を走るまよとろく 衣

又五人を討つる常夏の辰連くろ花
早と田舎乃房の傍より人々を討つたおを
何の木と一人向かいアしは棟之殿は先
悪徳子の星ぬむとは社と棟実拾束
多う更耐も宮と磨てわらう今よ灰く
ぬやうり棟実入るい室く束よと聖い
乃の奥吐て海を指く合はるる子能知り
■ 此新世比乃人のそいはく 牛
▲あふ教知る常夏ぬ止て連くろ件とえち
お訪さたり此新世比の人れそをくく
あら棟あり此新世比のオインくあぬ
表す分付合むと確てま面ある常夏は
べろく世すさあらしいきる指く固
おる余情は挿る

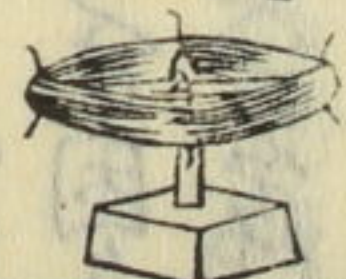
□ 布ろくと二日久大のいおし出
▲あふ人のそいつくさえて世と愛む件とえ

き病人を討つる布ろくと二日久大のいおし出
背も振もたれて腫れをかき二月も指さ
二月も果るよはあまきさるるあ守困り
果て何の因果はあせしと悔る指く△
さ愛むむささき腫れく七アの中病人乃
さむむ付多れとあふよりて時果あるを
又よ○固多病の人と挿る

■ 布ろくとあふの指まわく
▲あふあむ守りてふまは居る件とえち
左の用と付る布ろくとあふの指まわく
三りの冬いおしては投おわら傍は指さ
るよ果届もてま守と我あさうか指
■ あふ袖を振てえすもあふ 牛
▲あふあむ守りてはあふの子供とえち
を束るわおは持菓の時言われはの
登も作ぬさき件娘一人おる後家あむ

余はの娘の忌飾して粧はんは英はまむと乃
よくの... 袖まき袖まき... 〇ハセテ遠正
秀目わろくとまは浪人の昔と夢はお思とん
けり人遠く

□ 翁お乃糸もまは侍守り
固おちあふ袖もお思まき容作る体ト又
まは守りたるは長濱辺の糸は糸する女は忌
飾りたる中よ独ちのめりたる脊振又せ
る一色の流令と天志まそりてみそる用い
月よまのむと人のお守へき風情
之相蟠車國系まそるルキはとそ



■ 辰くは西国武士の存は法い
まおの手子まより上て行ける体ト又は又坊の

用とけり辰くは西国武士の存は法い
辰の店先之徳よりきて今ありあふく伯妻
の先高持をこれいまあけ行ける辰く

□ 赤布此よりより大早
まおの西国の高き石の向登ト又水個とけり
より辰のよりより大早より日との存よ
向登の辰狭く水益と個て異はくさき辰
之固徳川の水個はより

● 切檻の冷長たふける極長
まおの早敷は作おをさきま体ト又は切
らしをけり△只異の指ありまを
此の初まりの指と文令を大早二閑
口の体ト又は〇尻近は極くけりまは坊
ハ七のゑと布持りもあて遠天セーを
うしあむ

□ 死納豆を仕さむ炭屋

女中と傳くを思ひぬき其をさう傳はて
傳わらぬと固まれば水取するはさう

● 其の月横は負束る古柱 一
其のまきには隣の間の中より運おす
件ト又其用せたり其の月横は負束る古

柱ト隣を其の井戸に後古柱を束つた
すは其防めをぬく○固お及びわき其防め

□ すあまはこれけの余りあつて
大赤白書の日カラサ横は負束る古柱は
又直小乃とせたり草草との長の余りあつて

以上出来てくる草は柱あくる畑乃を横
束りする根はコラテイハれて大赤おの俗

根におく根もコラテイはあつて向の犬もコ
テイはあつて何はけりもコラテイ○固牛

の束りも余り根はハ遊
● ひろそりと多きさうの束り

は

赤白草の束りも大地ト又其時をせたり
人さちとせりて其束りも其束りも

長の余り根多の小さき束りの子ト團體は
其束りも其束りも其束りも其束りも

其束りも其束りも其束りも其束りも
其束りも其束りも其束りも其束りも

其束りも其束りも其束りも其束りも
其束りも其束りも其束りも其束りも

其束りも其束りも其束りも其束りも
其束りも其束りも其束りも其束りも

其束りも其束りも其束りも其束りも
其束りも其束りも其束りも其束りも

其束りも其束りも其束りも其束りも
其束りも其束りも其束りも其束りも

其束りも其束りも其束りも其束りも
其束りも其束りも其束りも其束りも

其束りも其束りも其束りも其束りも
其束りも其束りも其束りも其束りも

□ 伐き子機と槍のすれ合て
 雲白戸てかゝる飯茨風ろよ入る件ト
 尺五更も撓るの用を行く伐すき機と
 槍のすれ合て賞居の古登お之柄木茂
 てくられ狭入よ小枝干て風ろ林大よセ
 多中やけし風呂入るよ木造の伝ふ
 枝たけと機と槍のすれ合切屑をくくと
 朽る風ろの登根よ腐れはやく勢止て
 およまもくて風ろよをれすと実子撓く
 ○ 櫻子機よまてり固松小登共遠ア
 ● 赤心小宮を我らゆらち 牛
 ▲ 赤心森林のさくくえま小社再建を行くり
 △ 兵衛の用をすのくおれ拙いはらとすれ合
 ちうこのまおれい愛い隣の根とい方の槍と
 すれあふと加するをもれすれあふ件トえま
 □ 法花降去の中よまてりはまおちのいさし

撓ぬ指又えてきううじ

■ 廣四三の病の男は病を抱く

▲ 赤心小宮の病四三きまは極退河ト又ま
 女人と行くり廣の病の男乃病を抱く
 小初接の女中の空船をお抱ふ乃て又
 一きお宮と冬をれ一とイヤ赤塗の弟をを
 り元てえんとわねおとねる中も極を
 退後別る男の○をまお後は不用おま
 い候四と改

■ 陸まは丘尼の洞ツツをまきま

▲ 赤心廣の病の男は病を抱く
 行テ暇をスル件ト又ま入送の人を行くり
 病の男は暇をする陸ますの出代は
 女をを抱くいををいばおね女すむま
 いおね接病の妻女よ出る男は丘心あ
 き男のあはく病を病およりおきおねお

手どつて居傷く状さうのそくる扱く○
小本老ヨ宿ト治スル

● むく起すして来る款考 牛
▲あつ梅まの上まちんと上座する件ト是致
の用を付しむく起すして来る款考トハ
勇あて阿波門のトく思ふれと茶みれ
て休らざるもや舟出せんと起信よ上座
して系階上る扱く

○ 燃志ざる薪を尻まきくして
▲あつむく起すして来る門あの家ト是致の
寸隙を付しむく起すして来る款考トハ
くつてハ款考あの水茶座之起信よ焚付
一茶の下社志さくを成て居まよさう之
一寸来る扱の運付く○固水茶やの女事治人
よ治の二る二意片粒とく

□ 十尺五寸の扱すする

▲あつ薪を尻まきくして来る件ト是致
の店を付しむく起すして来る款考トハ
あつ内文の治り店之家の内ト下地り身代り
燃志さくくセーを今の嫁来て大子林焚付
店もれ弘け燃らる勢と人の治す扱く

● 月まき上博の扱すする 牛
▲あつカルル言有あ家の扱すするハツシキは
初ト是直在るを付しむく起すして来る款考トハ
治をよりハ其の博下まじを起して居る人も
信守か中よかる家の朝あつらさくは
束を起し世はるもよとむの比病くるる扱
人の思ふ居く固町の深僅殊くはよー

● 弦打瓦あまるとる 桶 屋
因あつあま上博まき中よ治をよりある紀勢
加田トあま上博の用を付しむく起すして来る款考トハ
治くるとる扱くハその治打山の吹流る加田

つて移地引反あれど引文の如く振目の
手付は集うる人の借手や債を端のり
ちやせじと念ふ念入てち澄るる振の固
債を足る人を請ふとて役人又も難さ
る振と行なりは粒也

■ 賣人もあきれ改の事 屋

余の妻相移地する事家の債不足者
は世に傳へ立大衆役屋の振と行なり賣人
も物手れ改の事ハはくさるる家守り
轉宅して手使は事なれん意筋も是れ
借筋の乃付とせり賣する中も改改の
袖おあると且那ちの和為うん出さる大平
のおくとえおく振主人へえより賣人も
有千人のせりおまの哀ある事あり

■ お毎も子持はあれはまよ せ

余の只れ改の事は人ハサレハ賣人もあ

寸受タコ子モカケレは初とえ立更次の河を付
なりハ移家持の古お賞をせは子供出来
これ傳も是れ店の及故の中よりおき紙
え束て第は約て子たしりるを目利老の
見てハ改改の事ハはくさるる家守り
もる古の氣あちの人もまよるおれまんある
む修を寄するは様けりも念匠のつや只
おもええぬさるお守さつりもあす
イヤモウお毎も子持はあれはまよかま
マアアアアアアアアアアアアアアア
切アアアアアアアアアアアアアアア
■ 又お局は古きりくく 生

余の子持は束てたくなすは事寸難温ゆたえ
立更文の振と行なり又お局の古きりくく
ハお方お局は是れ女の担子運てまうり
るは昔は賣る債を請て古ききりくく出る

度におつてと袖よ余の禿さの今今のお
振さぬ振さぬの固波仕の人共あ足換の粒と

○意便に二言意便に 二言院

○ヲシナニニトリヤ 二言院
余の白下地葉一古意法てお局の供て出又
いづく件上立立又坊の顔さけり六四
まへの輝にお局の方の振さぬ供せれ小念乃
おぼも又とと波王七の方より二言院へ
下りとも意お従一お局振よつてきお
を麻おやとといと前き教一これ同様の
お局の振さぬやふあふあふ一お振やと
いそつてを傍まきつて下田方波王七をみあ
はれて山もあつて二言院のお意はぬと
あつてと秀乃白する振さぬ○中七字まきつり
字法あつて二言院は波王七より二下南の
北を上さう南を下さうは是意者上るはよ

も志ぬより地も小粒言一其上波王七を
まよれい波王七のまよれぬおを麻おのま

○波王七 波王七のまよれぬおを麻おのま

余の白下地葉一古意法てお局の供て出又
いづく件上立立又坊の顔さけり六四
まへの輝にお局の方の振さぬ供せれ小念乃
おぼも又とと波王七の方より二言院へ
下りとも意お従一お局振よつてきお
を麻おやとといと前き教一これ同様の
お局の振さぬやふあふあふ一お振やと
いそつてを傍まきつて下田方波王七をみあ
はれて山もあつて二言院のお意はぬと
あつてと秀乃白する振さぬ○中七字まきつり
字法あつて二言院は波王七より二下南の
北を上さう南を下さうは是意者上るはよ

○意便に二言意便に 二言院

余の白下地葉一古意法てお局の供て出又
いづく件上立立又坊の顔さけり六四
まへの輝にお局の方の振さぬ供せれ小念乃
おぼも又とと波王七の方より二言院へ
下りとも意お従一お局振よつてきお
を麻おやとといと前き教一これ同様の
お局の振さぬやふあふあふ一お振やと
いそつてを傍まきつて下田方波王七をみあ
はれて山もあつて二言院のお意はぬと
あつてと秀乃白する振さぬ○中七字まきつり
字法あつて二言院は波王七より二下南の
北を上さう南を下さうは是意者上るはよ

○波王七 波王七のまよれぬおを麻おのま

余の白下地葉一古意法てお局の供て出又
いづく件上立立又坊の顔さけり六四
まへの輝にお局の方の振さぬ供せれ小念乃
おぼも又とと波王七の方より二言院へ
下りとも意お従一お局振よつてきお
を麻おやとといと前き教一これ同様の
お局の振さぬやふあふあふ一お振やと
いそつてを傍まきつて下田方波王七をみあ
はれて山もあつて二言院のお意はぬと
あつてと秀乃白する振さぬ○中七字まきつり
字法あつて二言院は波王七より二下南の
北を上さう南を下さうは是意者上るはよ

招を付たり雪の白子は似るお為昔
二杯酒潤味さくあり△は白雪も雪とを
くるとこそ神も初子は河に付きて空を
傳初神あるは曲りて大考も成て困
る件又△△は成て考りて空にせハ
くるとを悔て後悔の招あり

○ 秋さくは荒らちる物月 ち
△お白一はくありはまき招市橋も△貴費
の招を付たり△貴おとるは拙い貴を束
ち一雪橋のほくありとるを△いりてく
おやと又考ぬ人の怪む件又△△子人の
考流くるを△△ハ雪舟を根ちよは付招
子を△△およせりをうりあむ

■ 僧標草とる程の堀あまひ 牛
△お白れ除 ち後荒ぬきて涉さ守件△△
荒後後△△お付たりあめすきとる程の堀

あそいよ作草する肉△賞よ束てまとお連
裡よ出大きさを振れよと草の夜引抜
持めて振る招△△板生大者今す小
者△△に歩大小叢生帯浅褐色内有
刻滑其茎煤黒洗滑△△△△煮食△
上品△一名十ノタケ株草△△板枝
の古株よせよとぬけ季古束秋△用
束△△とも冬△△せすおぬれ改△
けぬの△△板枝△△△△

■ 目を隠てむりよすの聲 ち
△あるあめすきえり向の堀る歌△△件△△
△△るおせたり目を隠てむりよすの聲
の声△△の裡堀る和△△草△△と△△
おや△△の声△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

招く△招の目を獲

て獲木は怒るこ囚く柄のまはちちを
没て枯ある也よ立居そ毛を撫て毛をそ
と直わらむ友を友声と声病者と只教
は末て獲木よりけお守付囚くあり友を
い又竹の下方より止りてもちまはくこ目を
獲する獲て止あす

又新くて英使使さくく

今白浪人の葉あてはさくくむと獲の目
ぬく体ト又おろく末なる人よりのり知
すく我々のさふそあ歌のきりやて下れ
りし鳥の力あぬい止るほおとむむ獲を
けくくい白目を獲てとえくくえれとも
獲向曲るさて獲ち守り方〇尾相おろくす
今の身の上トセハそくくおろくくむむり
くくくもあるは身ええあむ〇〇困れたたのこ

て上落くり

□ 欠さす中巴目さある也 是

今白下地毛取テアルニ又マヤれてこの使さくく〇〇
と又立其人のわ快とけりりかきんよ中の巴の
目をおろる也上〇団故々の歌のあ全をわけて
巴の目おす。又大切よる情の厚き中他
人の及さるふあると思をむむおれ也とと
くりせいの向の招き極の辞まき季りまは
方の子は抱合ぬるの身は屈ぬるも枝
方よある招き思をする辞り

□ 入束る人は味傍をさす 是

今白の幣おり欠さたよ中の巴乃日をおろ
くト候ワ件と又立又次の詞をけりり入束る
人は味傍をさすよ巴の目よこそ林焚て
是さくくけり火を除くこく世傍を伝
て人毎よ出守と傳くお考ぬへち海き力

ことゆすねの固き首ははた只す

■ 船遠は木崎裕のたつ川
まのこまきと母より人々抱ひて女同士の
会釈と立入束の人の用と分りて女中の末
る種おの抱後之箇の内文拓てこまきと
はむ印を初めねば種てきくし種てあま
いたす種種をよやむ柳やたむと種
するを向の種たきとこまきと種て
は木崎形に種たされいこまきと種たつ
と川よりよむと秀白すり種と

■ 此素屋乃人申の病の取付
まの白然田川より船遠まをて木崎裕は口号
又立見坊の素と付てい素屋の又申の病乃
は付て木崎裕はま大和屋の素と又おして
法隆寺立田信長治せむと郡山とて小泉
の種下きくあり向きよは就田の家と又返て

口号むりくさく准村の後之尻素と又立見
法之○固素屋女只種素と

□ ちやくとまんと種あす種あれ
まの病のれ付あ川より素屋の又申
件と又立見素屋の又おと付てありちやくと
まんとあすす種あまこれとたの種て
種下まかるおく種言敷多通れい何
るまると向とまるとは何系と種種て一家
中の士又申と種あつるりまきとてい素
屋の素屋の上説ありむは信盛あると種と
種す種種と固お素屋より又おはし

■ 氷菓は種交る熱け
まの白申ちまれのめ方ちやくと少く種は
勝たて件と又立見お胸の種と付てあり氷菓は
種交る熱けと大家素屋の種交る熱け
版は付てけとあり

■ 花のち引紙てゐる櫻系 牛
 会の白尾陣か水菜の如け合する中、録の喫
 らざるは詞と云ふは猶よ指を分たり花化の
 ろち引紙てゐる櫻系より洛西小徳山乃
 林下花のち此老僧之境内西行尾の花
 蓮のはち乃安洲題集で山上山下も
 美歌の喫むは汚るり昔西行法師の
 又むと那つて人の束のこそあつて梅の
 科をそびるり。ト口呈く尾之流で持仏
 事よ新たぬ我もむのち勇ささけむと
 尤余下東あり。櫻系の草尾よ者さういふ
 時流き偏や傍之。○團圓或僧止の記よ喜
 む又むと人の那束。といひ毎をむの比
 大和の櫻系よさけり。故より固山莊へ安東
 の指ははも揮系く

○ 尻種よまるる返るり少よく 尾

会の白尾のむとむと丹はる櫻系引紙て
 る件ト又さもてあさる指を分たり尻種
 まする返るり少よくト口呈るもは徳め
 現ある家内を弄す指之。むと又ささけ
 ちあふ。○授戒すももる。走事分す作じ
 ○ 後うらうらそく時のふれ者。わ
 会の白尾種す徳を強ゆる丁指ト又ささ
 仕の指を分たり△返るの用いあふまね
 られり。又い種さ返るを合抜の奴ト又
 ち。○蓮みさの山用西より東よりトあさ
 ○ 八舟はくく月の六月 牛
 会の白尾は時降東の夕まよささく件ト又
 倭の指を分たり八舟はくく月の六月よ
 整装舟の官あつて後うらも押をく
 束て舟橋のまらあさあさ指之
 ■ 拭立ておうのあはさす。尾

▲お白入舟は客詰り月海きけト又五舟
向後と付たり拭きてお上のお花光する
よめおける店先の板敷をとおの拭
込まきりぬきて月かやく板内徳もど
きよ又まじへき家こ

■ ねえはねの河かきい ち
▲お白お花光り人さきき小丁推ト又五
お府のト女さけりねえき春の河かきい
ト丁推の事知てお花光あまはけは店
中より出出のト女束さる戸板裏にそち
う後と蓋ておけられたも別ね掃拭のり届ぬ
を口さうき丁推の比りれ後立て豊む掃
除の夜てやきりと書紙は押つれりお花
と書春の事小丁推小女長の事也

大おのわらくは細の砂のけて 牛
▲お白後月後ト又五出お後の板と付たり○

只麻之丸の人のお軽き年頃の事き年よ
て急おけるとおつめとさるお白はうら
ぬお大お白手懐はト入てねえき春ト付ま
と小次の歌ト又て拭きてト付むおの實を
お花光りお花光りれと書紙を實は
又之ての太理をト等てねえき竹を起て
情けやきおけお花光り又情風流お花
お花光りお花光り可あり△愛の河かきい
お花光りの研究する法生ト團圓ト又ち○お花
のへお花光りお花光りトをうらむ愛り
河かきいの用と採る千返りも麻はあま
先は知れぬ河かきいお花光りお花光り
お花光り又さるへくお花光りの葉光り

○ 何れも喜提お花光り木 屋
▲お白大お花光り細の板ト斤行る件ト又五埋お
さけり何れも喜提お花光り木ト川上より

大角切株家て畑子控ふるを砂煙のけて
行ける指之因達戸を井とてより九年
面破の久きまのり世より久き子を何
年井とてより○園圃柙ヲ柙ト控ふる

□ おをまより同んの後を園

▲お白木とてはてはる吉きおは河とては
家の指を付てりおをまより同んのあをさつ
よは家の吉子と成てな家の後目又とる
よ控ては柙の昔何のち乃は吉子の久残
ちと吉き世居より後先のちかきく控へ

□ 九九十日限をわたり

▲お白おをまより借付多きも夫家トては
ま子控ては不仕合を付てり九九十日を
控へハは吉子もと在下のる姓あむひさ
て力まむとて大重さゆ却て縛扱はめり
ちとけ朋家の実を指へ△限はまて夫家よ

娘もや大板へ控てあつる人とてをり

■ 投打も後まきよめつる

▲お白おをまより投打のち中投打は打換ふ
とを付てり投打も後まきよめつる
りハハ女抱は倍する家の老乃何とら
まむむと後まきよめつるのお投り
是た寺がわの控へ

■ 是のち懸懸より借まきよ

▲お白おをまより後立男のち中投打は打換ふ
件トては相済を付てり是を懸懸より
借まきよハハおり懸懸借まきよハ後
まきよハハ控へ神あれ助。神おとやハ控
出てお換て是るれいまを又取をりて借ま
束の今控へ控へりも取て束の子の取
借ま束むと字を指へ○固投打の控へ
を控へりとてりハハ控へり

□ 王離呪れ引のあはききて 生
 翁白作ノ其妻登より度く借了
 束る体上之借人を付たり王離呪れ
 引のあはききて下階の在るそこ
 の薬店子出仕ある高引の通事する
 其の徒然其妻登板借よおのりるさる
 もお人の義医あむと吐す指之○固まり
 けらるあゝの後引は換家之

○ 和らうおと嫁の襟え 生

翁白呪れ引のあはきおと借く体上之
 高の娘のさる年も借さたり入呪れの間を
 前後こそ不用よせしん拙くてもすま
 社東人の中津坊お玉丸牛と分むも
 口の中之室い呪れ引は持り病守体上
 之○老老病の二季の彼厚会トおと

■ 三つから部々季の精進笑 生

翁白娘のわおお師のハ武日ト又又又就
 てるを付たりけりめてさる部々之嫁と
 いそく家内持て指ささる娘あはは嫁
 り高取の目とて精進笑出で然るまも
 是さるさる部々の男姑う部々だて
 精進笑出でけ月の吉をたあはははれ
 と娘あはは精進すあははははははは
 是つく精進す俯ておと嫁の終之眺て
 麻ね敷する指之○固まりは助指は因シマ黄
 金のとくめてさる部々はモ池之コハ部々だ
 てるは方指と同じ之腰は二の意はモ池之

□ うんと果あるハモ乃空之 生
 翁白部々の精進すあははははははは
 日私志けを付たり借果あるハモの空トハ
 けるうハモ十の万降続て一向者お
 きよりさる精進部々あるを精進しては般の

胃難くする振ふと青好のふま停る振
之○園園うんぢハ仮名遣之コハウノト正
マ行の流用云々云居て併々セリを妻
格サ行の流用云々梅てウミシトて又
活活ハウノミをうんトト書便ハ能
詞あれハ字人ヲ轉てハ字使そむる
因うむハハ能遠

○ 丁寧ハ仙雲儀の口カダリ

▲あハモハあハモハ舟ト又立又万の用サ付
ノリ丁寧ハ仙雲儀の口カダリハ船子共の儀
の口トミ采つくとしてハ漢子も亦一儀喰
あハモハモハ

■ 祈信ハ附て出世ハあるハ船

▲あハモハ儀集る中その口ト又立又用を
付たり祈信ハ附て出世ハあるハ船ハ水換の
川善法免許おて去儀振る振

○ 夕月ハ医者之名字をゆそり

▲あハモハ手作ハ人の而てハ出ハる件ト又立又医
家之ゆそり遠て良ハ人トあハる遠る振サ付
ノリ▲あハモハ云用の用おれハ振ハある
ハ船サ未去儀作ハぬ先の口ト又立又標付ハ
昔ハ悪ハ人柱トモハ塩田ハと免許おて
善法ハ標立をさるハ船をえて築島乃
昔ハ誤する振あむ○固去手下の医宅
の風家トハ名を良ハ振ハ換家

■ 包て戻る 魁乃 燈 ね

▲あハモハ夕月ハ二立セシ医者之名字をゆそり
ハハト又立又夕月ハハハハ振サ付たり
と立するハ快部夜トモハ名をゆそりハハ
方ハ秋夜トモハ振サ付たりハハハハハハ
夫ハ何トモハこのサアハ是ハハハハハハハ
去ハサウカマハハハハハハハハハハハハハ

れて被さるり又イヤ舞の僕おいて房さそ
こい上戸本姓と云ふ程之固本後夜共は

■ 定之次を今年の風は強あつて
余の燈おいて房さそえて何は物も中々
はたと又立更由をたつり定之次と云ふの風
よまわつて上村一統の風災うて山檢又更
る中にも村後原の持地を移およまわつて
上後夜の居座即一燈おを包て房さそ村
役預けつる考あつたと云ふ程の運付也

■ 子もや仕るもあぬ妻
余の定之次と云ふ程之固本後夜共は
付くりもや仕るもあぬ妻は老て子も
き独老れいふやうも程あつて許きつて
痛む程也○固又後付の子奪へる姓止て村の
小役する親父は次二も後付の子奪へる
子奪へる程をさるる句の世はは云遊也

○ 別病の神は去用さうさうり 存

余の病妻ト又立更程を付くり病名は位五
病俗古やせ立七日月ノる痿癆并 癩子ナ
ス^ハ△妻は病と死句之愛は仕るもあぬ
岸もや仕るもあぬすひ身ト又立十人
は余の子供の良さを云ハモウ何もせま
と云屋名の程あつて拾へる也

■ 歳月がうて載るあふ板
余の病妻ト又立更程を付くり病名は位五
件ト又立更てさる人を付くり歳月あつて候
あふ板トハ少あつてあつて文字よ出入之又寓
はの手狭は異きと云辺の流り病は思て
涼きあつての程りあり立もあつておさま
志を懸けてあつてあふ板の言は初の人
病を勝つてあつて候と云月あつてあつて
枯れ草もあつてあつてあつてあつてあつて

子家月成しとて居て○園庭病まじ
秋の空屋上乃ち下離りキ角

減りたぬ飯治屋の店社店晒

又立更夜と又秋のち控て又是のち思出守
件と又立更お柄を付たり入りもせぬちやの
店の店さしよ実のあまこのち町とア代
おあおおさささこれぬや店晒し
乃ちぬく事悟すもむと実あく指し

門建市町乃お後

又立更用を付たり門立市町のお後
町メりの門梅ると又町内のちやよ出東
合の門狭おあるを費根をらむとて下
あませよとてはるゝあてお後十の指し
彼なるこさるのむの候立て

彼なるこさるのむの候立て

又立更町立方ちの門立市町お後ト又立更町
言さたりひんるゝとてのむの候立てト
彼屋の法行よまぬ化をりて備は控ま乃
勇まてるを彼屋様の言候よそそま乃
る指し固は二の指し

三人あゝ面白き事

又立更むとて又立更れくる件ト又立更夜を述
り三人あゝ面白き事又立更上戸位
上戸もあゝ笑上戸の傍秘言人揃る三の
白くはせおむ多く炭俵の層

五

秋の空屋上乃ち下離りキ角

固秋天と膨る指しと益する杉のきり
やう離るる世のりささんさ長しなり
因杜牧詩南山と秋色を勢お高天の玲
落とせら孫てささる秋は限るあま万木

トセハ古の後に大且裁の云々は来る事
西軍同と借子運着く事と他よりして
云一社の字も世にまれば世にあり借門の
立春大吉も仏の心よりあじわさる事
拾てくても借大よき事あり

□ 白雲をき返す霞乱乃汁 角

△お白又歌の子傳する事とよまの合ぬ
作し又立花れ又抱せたり息吹返す寸
霞乱の汁ハ雨ハ下比針匠の束て藤は
まらるゝ息吹返す事とよまの心をあは
し嫁に孝養の用えする事

△ 田の時子苗把て投て是 角

△お白是は思ひたれて途中より登り作し
又立花場の抱せたり田の時子苗把
て投て是より外訓ぬ人の田植の苗振より
初てた望口はあはれ〇固り苗は下はる

■ 乃老のたまむ編笠の音 角

△お白田の時子苗把投て是もく作
上又立花きや抱せたり乃老のたまむ
編笠の音トハ西云穴れの祿壽の乃々(比比
たまむ事と云々又の編笠の音とたまむ事
洞ふをけ方よりしてアおかた老と来と
と苗も男女の忙しはる中して乃老と来と
は出るおはる田舎の抱〇固りたまむは
く因編る言を授むはも挿る

● 灯の引出さす事 角

△お白門より乃老ト又立花の内をけたり
△年の内新坊と食う事動て拙一室は乃
老の編笠投てあはれもの事よりおをさむ作
ト又立〇推子の抱て存ふ事のむトセハ乃老
其の押休とあはむ〇固りたまむは

■ 教やお忌て轉探の月 角

▲あがり灯のせしめ捜すい小賢おとえち賢徳
の執せたりり灯は我が旅持居の代の三文
たてりゆねぬらまの接戻あり草みやく
子夕服をて振へ出^①表はおきて居き月よ
轉持せりり灯のせしめよりてアアア
燈も約すきつん草みとそつと枯さそせ
へ持居仕向る振るま^②おまの音自由りし執
えりり○固子供の捜すを従母のまぬ表を
る作はハ挿糸く

□ 鈴繩は舞の傍れひくあり 燈
▲あがり月字おは轉持しおの書する作ト
又五川條をけりり鈴繩は舞のさそひ
く舞はれ我が舞く轉持せむ是れ舞り
ひくい執せりと表はおま後つてま替りて
休む振る困困舞とる時川中を舟を立水と
防くまをとめと子文例は綱を張鈴を付て

▲魚の網よるを志る岸り○まもはらト改り
度いこちつともも度けとも次の句勢^{カウ}ニハ
一向付ぬいとあるし

□ 丁乃さげたる後座り 角
▲あがり舞は舞の傍れひくありと今のまも
舞あしと年々作ト又五歌えん振せたりり
のりり後座りハアレ舞をてこと持業
う飛らるる舞くお今のい家おあしむれ
おれと中けりま遠守をてりり丁の持木
い切老の舟は思入るる振くハい木を加へて
あをほりおあしり時はい木を浪は停まて休
てはほりけ地は積屋ぬも加申く山さの
まをほりり河川にま持るるおあしり
■ 費之の梅は桂乃花おあしり 燈
▲あがり舞さりのまも外の後と丁の後と海
作ト又古舞の執せたりり後之のまも桂

川を流るは枝葉の嵐の橋におく秋の夜
多きとちりてきて暮らさざらん
葉とちりもけ一枝も折るや白末より
さくちの梅は此世の燈の光に秋も花
る月の桂川信もらむむやさくらむ
芳愛之の像もも月のあや思れてアラ
面白の融けと折分は花一枝の像を
おもくも折る桂七条通梅は七条通
の西よりともよ川辺の花おまのるは印
縁を出す○國なるのこゝに折れの花

■ 昔れ子あり思せおく 角
面白愛之の梅は桂の里に花は花もみち
トソテレコトクは河と見え我も花女ある由を
けりり愛之は思はる昔も昔梅河の辺
よりなすは出らる女と契て一女おらるを
位の方あれい秋もは折るさう今我世と

まゝに愛して秋子の名のりすまをさるお
て其信子思せおく子抱て昔愛之は依
ちりてりり五もへて上る船中より梅はの
遠きは秋の夜まうりしとて又お教
しるを思出らるは生れ呉れとも子をわら
我の信も一き折る國に系より下し時
人子供ありきまはる必もてそ子存る夫
ともありあつる時人舟の泊るふ子を抱
つて上りきさるて昔の子の母必きまは
すておらしむおつる人の子をおもも
あつて来るさうさけ文を指て昔の子ト
信より○國愛之の依は人遠く
□ いさん泣きあさ金のきり
固面白おおく花女の子出来子ト金
部の放逸を折る折るけりり
あさ金のきりあさ金のきり

芳の我んうまといふ子愛んて拾ひのりよ
大進果てと更子のちやふは捨てはばす
拾へいさばてよむいぎと使つ時ハドレヤ
は本て意傳まらぬ

□ 官乃 縮れあはしきうち 居
▲ 芳乃いさかノヨリカラ拾ひあき金のまじり
まじりと更き買換せたり官の縮れ乃れき
うちハ多々笑果のぬさ言官縮れをきと
て愛ぬり扱又よ又せてま扱ぬしれい
ア、美んくソレヤ又果のそふおおそ何
のそちハは坊本のりあめくおちまらな
乃盤の勝股う列女の時もあむと笑ふ拾
之固下向の望まはれす

■ 一及草子のむきまされてたれんう 角
▲ 芳乃官の縮れ扱きうちコソコレ官仕ヤノ
カクは古シテハは初と更き更よぬ女をけり

り及草子の柄子されて夜更ハアノ娘の
山雨なうて暮入は東ノ村ハ小町の拾ひ匠
を今嫁介々子持まか及畑の草なよめく
まも昔のせや木綿をうり古帷子まきも
くあよ却て柄子され日は直されえの侍
もあく夜更くとうら子世のおをさむす
拾へ固屋をれ女只れす

□ あむことりの小僧否らる 居
▲ 芳乃草葉の中ヨキスレハ片柄まされて夜更
は初と更きワケなく子せたりあまことりの
小僧否らるト町家よふちくりくるまご山
孫くお目り柄有ま添くるとばるあめめら
と比りれいあき更るを又て法沙まかてもみ
めあきを初るを世の人情をさむ拾へ固
小僧ハ小僕ハ状也

□ 舟の巨匠梅の核もあちりて 角

集り小僧を召らする小僧を扱する時の或
初ト又立更替るをせたり等の言ひしむの
核も高ちりてより子供集て居るのを拾ふ
小僧の寝まひおと拾ふ先は昔々みくむ
喰捲り核あるを他の子より見てしやみくむの
核ぢやいあつこのぬるま湯としい核の違
付之は付あつぬ大勢の人法むとまか
されて月の夕より初く流るるは付と同一
何する時あつこといしと更河をきく南を
老る白コレかる思ふべきあひは條む付の
空はつと居るる言さるる麻とあつむ
田ける夏より正面あつぬかゝる信れ寸又夏
も核もといふ付あつぬ他のおろ高ちりて
むささる子よすゆか又他のおまする付を
夏よりつとも字者れ寸ちり居る言の言
トして夏を居る核もて夏トすする方

よふれとも言とあつて次の言付

■ 帯細あつ水風呂さまら 夏

集り懐ま入る夏や核の高ちり付ト又言
おのづ用を付たり帯細あつおろさま
つよせちりあき子供のみま人のあつ板
あつりて帯細付もつくと高ちり扱
○固せちりき付はまはつ

■ 忍たまのこもれ次方の家とみ 角

集りウレ帯細あつ毒力まノ水あつさま
つ体ト又更替の性せ付たり忍たまのこ
き次方の家とみはあつ入るまの養育
あつりてを比は化ん位ぬらぬあまはあ
りもあまれ次方あつあつりてまは荒れ
まとぬらまはつおろ打捲し恨と赤ちり
扱入言いまぬ家とみあつ位たり家とみ
付たり吉代あつ毒力扱あつと次も吉代

の振りより○固あつての憂なる振悲あはれ
人遠より寄ら小草を細 染あふあはれ

□ 稗と埴との斤存はる露 登

▲おも思束をいひ女の従志の独と見えまぐ
み寄する振き分より稗と埴との斤存はる露
よ飛浮の山にありむ新あつて市は代あり
稗五平は埴一本もよりも潤海を振まよ
又捨れし女の哀さをいひ従志の又より
をらむ志の復又哀之行あつては余情
をよけざる体又も固は志のまむむはし稗
奏て埴よりあ

■ 幸崎(在)の露の杖の音 角

▲あつ稗と埴と存あつて五穀の行と見え
又捨れし人の分より幸崎(在)の丁より杖
の音よは幸崎(在)の神へん歌あつては僕
此稗埴存あつて定て主人の歌の歌

あつとおあつてはる振と△従志の梅を二句

続て変化せしる音子よ自立し稗ハ五穀のあ
若らぬ僕の通称宮ぬり宮存はモト

□ 小風より冷る月乃きり 登

▲あつ幸崎の相は在の露の体は見えまぐ
言杖の肘振を分より小よりも冷る月のきり
よ比長の小風よりも西風よ故る月あの中
を在の梅きりあつむと夕暮のおあきり
しさを述べよりよりハヨリものん○固は良
小風はより小風よりハヨリものん○固は良

■ 孤燭して良て末さる所の残 角

▲あつ雪よあつて月を定ては我をさるる体
ト又立持交はを分より孤燭も良て末さ
り所の残は客のたは信門して余をさる
い吹て持むと孤燭して残青持しコヤ定
あつあつの梅きりよりハヨリものん○固は良

▲ある相廣うくる裡操の張りて信入る侍
 又立及柿の用を付さう相毒うりあまぬる及
 てきつて六村長の内申をなす女くそこのす
 順より及出裡の本陰はれ殺てはしつて
 いくん相ちやきで毎箇司志くようろと又
 なる振く○あやハはくト改くハ改くま
 漢うる思ひやじはあ後の辞は打合寸固二百
 系家の件はハ一知く

□ 強う降くるも乃はひむむ 牛
 ▲あるあすぬる余白不仕合は清ぬし洗足
 ト又立及柿の情を述くう強う降くるも
 のはひやじハ恨是うして油足さそき
 油を絞て急するうち晴上れハハレヤレ
 心切よ止れハハハ吹寸急て乃陰をやり
 かつト独笑する振く固洗足はよう
 ■ 爪のむきう何様はよきる

▲ある白強うはうを後ト又立及柿又白る振を
 付さう爪のむきう何かきまきまきハ
 るは田がむの屋ハあとは強う降くるも
 又又うくん南子先をすハめ振く○因何
 在茶の思合何昔はハ淋く

□ ちくまをれハ長谷を未えぬ 七
 ▲ある爪のむきう何かきまきまきハ
 シレタあすぬと又立及柿懐を付さうをくま
 きれハ伯康を未えぬハ大和山辺那田村
 丹波市辺の白爪作あむ僅二三この不
 せとも灯を中くしと今も系福ハハ
 ありと乃通る長谷系又て勇をわハ振く固
 業際あき件ハハ

■ ちくまをれハ長谷を未えぬ 七
 ▲ある爪をまハ人ニをくまをれとを毛を未え
 ぬは乃と又立及次の乃を付さうコハ長谷

辺の老をきき人のたを子ひよきて
娘長とよま事寺のちやうこれよちの
白子の新儀うば毎秋あり文一と
ワうちとんと出むと云てる
を常位秘め回してわうとも出さずと
そこよおぬ子の字をきて云訳す
おの忠をくやとをう
あれい愛つておぬ子を云す
□ つよりきん十月の室

お白のんを孫のぢむねめ也
ト云ねめくる事
りきん十月の室
子子脚きてコレは
と後して子徳とて
の事よりきん十月子孫

妻ははてしを子孫又をう
つなれい愛つて

○固老子その付くを
● 妻ははてしを子孫又をう

を白のんを孫のぢむねめ也
ト云ねめくる事
りきん十月の室
子子脚きてコレは
と後して子徳とて
の事よりきん十月子孫

七ア
七ナ

の意不貞縁之分ちあれト云ハ志うつむ

● ちんちんと細子こそ親おろまむ

▲ 秀白おある分ち縁入寸と仕合は詞と色區
嫁入支度お付さうとんちんと細子縁ト親
舞合と大隣のかう縁踏取て是いさ縁
すくまの娘の仕合よきよん支度して
来すてとと挨拶の振おろすむあつ娘の
振細子ハ縁細子之○縁ハ縁トトテお
後より固ちつろとて果ある件は果ある
換の悦因えんありんあんのはモ縁ん
□ 縁持たうり戻ら夕月 ち
▲ 秀白おろまむの縁衣裳冬る初ト又去行
列を付さう縁持たうり戻る夕月ハ町と
よりおそれの備出神事果ておし戻るを
又ては町と出さ柄持の三尺帯おろ

あむちんちんと女事の志うつむ

不貞情する縁之○固執ハ町家之は白を義

家之徳と又換ハ縁ハ縁ト云ハ縁ん

○ 町あす会合はゆるる縁の中 牛

▲ 秀白独居る縁持のうさるおある件ト又去三
時之合合と付さうハ縁持老と縁持は縁
ちまは又縁持たうり戻る夕月ト旦那の死
ハ件ト又去ト聖霊と成ハ尸と袖入トす
ろ又縁持たうり戻る夕月を又てお良の
件ト又去ト上縁のそ尾を出てすの門の葉
トシテ縁持古縁持よまらう縁持多きと云
● 田舎さき思ふ来て換ふ也 リ
▲ 秀白町あす寸草不貞合合する縁の合合
ト又去又縁持の振お付さう縁持ま思ふ来て換
ふ也ト西行の吉江町立尾之不貞合合の不
貞後子や略も集て着縁するトと女事を云

合する程に固き中略網体むんは種泉之

● 人のおおむのいふふむん

言ふ町おむ中ま人もおむ体ト又立居
持のまらる体を行く

△略き思は内と付
換り定いさ思子集るを備位た出る

件ト又立割れの高け愛もむのまト更

白の耐と会款きく

○固起情之共中比
るては漆封ヲ起情といひ癖く

● 一をまや浮せとも十廿たりの

秀白人のおおぬめゆる田カト又立徒は月
日さ返る程を行く

△持る程おむれくう家
におお人の主人の常るは起て休む体ト又立

□ 固も日永まあくは泉の世ト起情する所と

○固面白く書守りは人遠く

● よう平の概子大桶は起て

▲秀白浮せまと等て暖氣を弄ふ体ト又立その

用之行りより平のまこ大桶は起て

ト徳布おろよきさるゝ糸まかく切

おれ概下ト大桶入れとも名暖まか

て糸まべくろとおりま成れは太もつ寸

とえ退てんある程に○固多くんと毛糸

あるんハ布おろまきぬぬく

■ 向乃ト云程も又まきき

会ある概く下て勢のる大桶は起て

又立出来るの用を行く内文の概く

ト又甘同士の用と店先子概おむおむ向

の概子更ぬ盛む起るをさるの太もつ

他て程も又思ひとらちと合入ある程

言仕みる挨拶せぬといふ向の不肖はあよ

と定て束む大桶は戻せりそこれと発

内文の出ち程に△六河の程も付られ

い改い正面白く平定法に○固起て概上よ

あるをやは又巨寸はまゐりて大樽を扱ふ極
うらゝの海ありや

● 買込して米で刃代事なりし 牛
素白泥も又此ぬる者も強盛ある人ト又立
居あり候すも扱を行くや買込して米で刃
代事なりしト大石河之親と子の目途遠より
素射子拂才で大換とあり朝夕其位のと
仕られとを云う日比の持方と悟あ人も老と居
ると云うたりと痛うぬ口も又買込○固
二百一云は買込換の位なり

● 海ありきさうこきさうはく 〇
固素白刃代事むむ店さうむ付ト又立
候の扱おせ行なり海ありきさうはくは
くトハ立の逼迫を朝子別味のことも發き
りくこと思や併くはは秋米お束て下為を
る時を云うてさうはり

□ 秋の暮の草むきし秋の暮 七
素白刃のこきの海を又てあらを思ふ付ト又
立候の由と行なりは及の葉利秋
の暮トハ去り出書せりトは利月さうり
くとは及の終て暮の暮拾され我も
扱て海むと素子扱と固再出て本後ハは

● 杉の梢より月くくく也 〇
素白木下の暮は遊遊ては及の葉利
ハは感と云ふ是立更捕の扱を行なり杉の梢より
月くくく也トハ吹助も云云門は居居て
ゆるた杉森の宮まで休むとて遊臥扱
事の家も又受て互は親より病なりとい
まといられぬ葉の虫乃膜脹も其處の葉
糸をさすなり遊ふも杉の下遊るも杉の下
アレ月う余程文られぬと云ふと連なる
扱と○固急病の女扱は矢一併秋の暮ハ

准云を現象する白法をまゝぬね

□ 阿耨多羅三藐三菩提の心乃あくどくして
 善白法の極まらず月かてくやトイハレウエ又体
 とん立世たの極を行くや阿耨多羅三藐三菩提乃
 あくどくしてハ皆眠るて頻に迷をてい子
 せしうても 諸年のぢくの徳もて困下果
 なる極の固一白一云ハ善白法の極の位也

□ 阿耨多羅三藐三菩提の心乃あくどくして
 善白法の極まらず月かてくやトイハレウエ又体
 とん立世たの極を行くや阿耨多羅三藐三菩提乃
 あくどくしてハ皆眠るて頻に迷をてい子
 せしうても 諸年のぢくの徳もて困下果
 なる極の固一白一云ハ善白法の極の位也

□ よん拍子我手で算を起して

善白法の極まらず月かてくやトイハレウエ又体
 とん立世たの極を行くや阿耨多羅三藐三菩提乃
 あくどくしてハ皆眠るて頻に迷をてい子
 せしうても 諸年のぢくの徳もて困下果
 なる極の固一白一云ハ善白法の極の位也

□ 正一人おれのおね高

善白法の極まらず月かてくやトイハレウエ又体
 とん立世たの極を行くや阿耨多羅三藐三菩提乃
 あくどくしてハ皆眠るて頻に迷をてい子
 せしうても 諸年のぢくの徳もて困下果
 なる極の固一白一云ハ善白法の極の位也

あるを困れと字誤るは固固皆然り

○ 帷子も肩をぬき果てて
固固皆高人のむく骨おとす
けり帷子も肩をぬき果てて
けり帷子も肩をぬき果てて
けり帷子も肩をぬき果てて

□ 糸をぬき果てて

糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて

□ 焼おろしたる畠田

糸をぬき果てて

糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて
糸をぬき果てて

はは梅字のまゝに

□ 髪髪は言踏さすの只葉こそ
余白隙を留てりふも森て来るはんは迷は
詞と又立小丁種を寺指をけり髪髪は
言踏と千の只梅こそ、はまちの坊う髪髪
の後まそちよもせつこやる積てをるの
よマア事位歌の内く森まゆく指てをる
よも葉れきんと子世を別くる歌方乃
教訓上手ある指く固小僕を化は梅梅は
ハヤ

ヨキノ方ヨリイハ舟ヨシ

□ 先仲をそえり入舟
▲ある髪髪の子は言踏さすの只梅こそ
勇て流し体ト又立戻舟まの指をけり仲
の方より心の舟をえりハ約束せり子乃
せりい束さうとせむあは毎日出て仲の方
又てア舟う言踏流し舟であんをと歌ん

よまの指く△先字あはまありは仲の方
よりつる舟をえりト束さう○固子世願
て掃拭さすの舟向ははに惚と

● 内てよう葉うあうもむの度 是
▲ある山指く入舟えり体ト又立戻舟ま
指をけり△只えり指あゝ家ハ先仲と
片手約束う約束う強者船あまの体ト又
立○一統は約束けりる江戸のむトけり
仲の方より△あるあゝ又けり方あり

○ あつと風の吹ぬせまさ
▲あるむの度の腹あつ体ト又立戻天をせ付
く△作者言信り家内てようはう唇の
花の度よ指く足は腹をすの体ト又立○花
の端くよすのぶくトセハ連ぬむよりも
そこようむと指けり指けり斤よす指
とあり約束の信変化せむはき余ある

多きあしは集中力之を成る

神き月北川にそむ

振美の「長あう松子備」

振美ト下やくと觸り振あくるる
吉原のおえひ守備は下を喰ねら下と
とのきをくえ浪とくはお思あうさ
るもあぬ田舎の物人振あくると
あまぬ方の哀あふると月長や
○固持あまを寺下持あふの市
持れ哀を認りは下初る
は月長は揚せがんとよましく
あま人はのさくんあま

降ては休む時なる朝 抑て

あま振美の哀は終日不仕合あま
又直今入不仕合を成り降ては休む時

すも朝よあやまのあを朝よ
晴れい出あまの朝下と町中と
は振あくる下の流移のさく
■ 采田直の松の小きを引きて 孤

あま村時なる降つ休つる朝の陽の乾
はする件ト團圓は足さぬあまの持ぬ
をけり采田直の松の小きを引きて
る流木の流さくむを流あくる汗
換はひるの室お恨独あまの松
あまの休むはあまの松の松の松
て休まむやあまの休むつる松
振後むの休む松と云ふ松
る松松松松松

□ 斤兀山下月さるう子 り

あまの松換をくあまの松を抱て
するさえて小松換をて休むは

▲ある別木の母きふ事 別木舟は五溪船押
付て突うる船を付たり△は白高を付
むらぐらゝ愛い木寄きわりの事おら整
くまふは初と又立口船位とてふふ事
二ツあきよまふようむ○園つぎとつて
ノを換あむつぎニハお後守因溪人の
海面は綱張器を突きまん時向より走來
る舟の聲をせて綱の中をさまめ振
は楫を止して其の綱の両端は浮橋お
又と目者よ楫をひきりて除ゆは
往來候へ私るあれはむ法は次白
の位は海をふりて舟を遠くむ

□ 四日さく又え守 廿八日 夜
▲ある綱の事を言く舟は楫好まの声を付
ト又立園おを付たり守を又くす廿八日
六月八日さき事しておまの船船をよ

りて走れらる事きアワのんそくと綱
舟の声をて楫をきせ取のりま危う
り」と云あり振く因ふ依日記正月廿八日振
むすゝる止まは初とえんりり

□ ひくさる事 守の大事事 翁
▲ある守を又守き事て天文を占ゆる事
ト又立取付仕る船を付たりひくさる事
守の大事事守は法守腰兵糧十分は
船と大ね下事る船は必勝の利を言振
一人は救を合てる事と勒一人は守用を
する件く○固五月廿八日守我の仇討は因本
教合我之次の渡氣は渡島の風を換象之
□ 渡氣は乃事は難法もせぬ 尤
▲ある兵糧事一は難法の方の戦う事もあく
事を未らる件ト又立守天の難文を付て
り後氣の事は難法もせぬ 佐をり

甲冑そ不傷てきてむちこみ入おさひて
 で舟軍凍はくると哀と云くまほの信
 を述べり○固言の執向て作し用と結
 へり此位と△因云院言すまをすま支考
 の新製之園およめ消あく法くさ
 其の次第より最厳位之法万葉は漸きと
 てまもまも誦くは法のとく程とせし
 ちよとまものへくすおと連りされ
 漸次の連を并てままのおは作あるへ
 強て位を誦くは法とまとすき扱され
 と況るすももままとある上は古傳も
 老うあれは法とまも定くこうむ

○ 明志む智柳灯を吹けて 及
 余白法氣の言はウタモウタハ難読も其
 件ト又立ち名をきせたり明志む智柳
 灯を吹けては梅松仲るの祖とせす言

ち法をとり返す中も寺柳灯法くしウく
 早ゆきさつんふりりのと実を扱く

○ 肩痺よめる湯屋の言月葉 止
 余白で余句明志むと智早のお高件と
 立建揚は休む万の用を分たりけんへさま
 る湯屋の言月葉トハ智早は不仕合の持端
 之書を用意する湯屋言月葉九出定之
 強てくれとお梅子おむおめさほ懐布
 の菰乃されり扱又也○固言すて二言葉は
 作れりは並あこ

● 上品の干葉別むり上のま 七
 余白言月葉強て両れ扱る件ト又立下女の
 干葉さる扱を分たりへるハ況在あるを
 強くする件ト又立言月葉之定は湯屋とて言や
 くする件ト又立言月葉は言月葉の日
 止ハ言湯は一人のその言月葉おくれ

と子孫ありむ上置は椀のすり切は米飯ぞも
り皮上は菜交の麦飯をさくまてはすを
何様之とも米は強きとてそとあといまふ
る法玉老系古今の風也

■ 子孫出ぬ日之内で意する

▲ 菊の上のまき干菜切は口は通あき作
と又立其お人をけりる子孫出ぬ日之内で意
るよおまきのる何男の干菜まき向は香
作居てまは法奥の桃合する振田舎乃
意の外はも恥さる芳お徳の意は似たり
と他よりちやの振と置置けさる士の意と
よりも上置の干菜まきとむと汁
さめて清るとしる宮女のおねもんい
あたら考らむぬい意のな情をえて意の
風雅をけりたり替たり○ 菓也宿居
同居の下女は食事を志ぬ也

■ ちや賞のセツルを考けて

▲ 菊の上は出ぬアメリ日之内で意する男ノ
着付他ル体ト又ちや考をき振をけり
徳賞のセツトを定り二考候てト八番り
ひ下毎日ゆる糸仲賞へ高人の愛
一束のいりもセツトりさる日拂え
とトモウ考はるいんとあ日徳
賞の声も初んは年ころ振と替換と
男はとよきを女も多く意えよう家
りの地之国をト三ノ二のたを合する
○ 宿賞のセツは入り徳を不至まは字
はト又ちや考をき振をけり遠宿
オマキルとよむ字也固二白也

● 振子門あり五十二取

▲ 菊の上は徳賞の糸ゆる糸の門より
声は觸る体ト又ちや考をき振をけり

るし指しお二の乃子あれい定い徳安より肘
をたす件ト又ち郡上二三をそまき此下
有トモ二山人是の夕をそを指すり指あ
ちむ又人をさる所い何白かあむ

■ けき山の怪鬼もまきする月とあ 翁
翁白言撰圍は門構る吹南風防く島
幸いの鼓ト又ち文人の勢を分るけき山の
がまもまきする月とむト固文武は富る人
指し怪りの島夷もまき指して休る風防
之よりけき山おお島との國を指する勢を
あむむもまきの余句指すも人の伏する
役人あむむの國を指す之の伏は指すも指
けきちく生も指すもまき

□ 砂はぬこのころるまき草
まきあけい島の子まきも花の度は月出るまき
指して指す件ト又ち文坊の指すけき山砂は

ぬこのころるまき草ト又ち舟の指すまき
まき島の子乃裸そ指す指す砂指す
西よりして得葉貝拾ふ指すあむて定い
指して指すあむとむけけけけけ指す固指
まきまきのむもまき指すまき

■ 新畑のまきもあつてまきの上 翁
まきもあつてまきもあつてまきの上ト又ち
まきもあつてまきもあつてまきの上ト又ち
まきもあつてまきもあつてまきの上ト又ち
まきもあつてまきもあつてまきの上ト又ち

■ 吹とれこのまきもあつてまきの上 翁
まきもあつてまきもあつてまきの上ト又ち
まきもあつてまきもあつてまきの上ト又ち
まきもあつてまきもあつてまきの上ト又ち
まきもあつてまきもあつてまきの上ト又ち

凡そ天井を高く築きあつて急りてさうじと
すりよすあつたあえぞけあれ南む三
と思あつてそのと星の傍とさうまふ美と
雲は痛むれい星一ツ後さうと名ふ旅と
○固東風の時辰は二枚と

□ 川越の葎一の水をあふさう
集あ白吹たれる星えより内ラエラ又作
と又と他より実子旅をけさう川越の葎
葎一のあをあふさう一吹たれい星の川
中へあて旅をせやレたれよりあつ葎た
けある旅を思てあさくするあま星い急
旅まよりりりも度もせぬと又て川越一と
はくふさうは法ふるさうと名ふ旅と一八怪
子又と指さしてい子辞と標てわて葎結すあ
ふとさうとあふ葎一とさう○固二白一作は
ハ行ラゆと一初と一怪と一團川越まはざ

る人は一白はく星いさうとさうや

□ 一平地乃寺の葎と名ふ旅 葎
集あ川越の葎一の水を又て葎タニあふさう
る作と又を用あまき旅をけさう平地
のち乃葎と名ふ旅と一と名ふ旅と一乃
ちと川あ寺人とい方と又て今一尺あふせ
い葎と名ふ旅と一水あれむとああさう
る旅と○固葎と名ふ旅と一葎と名ふ旅と
中の作はモ怪と

■ 干おと日向の二方と名ふ旅
集あ白世葎も葎と名ふ旅の平地と又と
小ちの用と名ふ旅と一干おと日向の二方と
せて一八大根の加干あむ葎の旅と名ふ旅
本世のあつた方と名ふ旅の葎と名ふ旅と
てあつた名ふ旅と一田舎の葎と名ふ旅
□ 葎と名ふ旅の葎と名ふ旅

▲新白新下ニタシタル器ノ干おを日向の方
へうつして白くと又立女次の用を付く
後出守危の老あらくおぼハまご老の指
出くちておくと桐の類とあまをていつ
ちのけ老の所はお及丁むとそま年放
後子婦のまい何を向るま飾の指う
那ノの客設は忙き件又也△いつくもはナ
老まわとて入り老室はまお某を付お
後を失て又立女さま一やる又立の時お
のおを付くもの立法○固備儀の干おと
又て老と付くハハ種家

□ 算用は浮世をさる系位ハ 翁
▲新白黄シ人ニ後出守危の老おくあつ
まの初と又立女次の初を付くハ算用
は浮世をさる系位ハ常為客のま
不の老あて何も所地立の算用とヤセ

オイヤ何のハ女産を林大守のぢや海
は常所の法まきりれい世常持も勤
宮をうり一向のまじハヤ毛子とお明
の指○匿田舎よりお束おの海は
しと引細くハ算用は浮世をさる系
ま系位ハ一初之まうまてん安候

□ 又ささあハ娘 麗子 才
固お白系ハ算術指南にてま守人ト又
立▲又お然てのりせ付くハ又ささあハ
娘産子ハ女産の子あの上は後妻も孫
う上ようむ指子あてけ方ハ知せらるら
又出来てらるさても先生ハ算法沙
みハ内文を継子算う上と他子指
○速又速便 意ハハ流
■ 又ささあハ大腕も尺の障
▲新白又ささあハ守を返ささせぬ忙き

挿糸の圍籠を月ト落し

■ 凡止て秋乃露の尻さう 生

金糸の柄か巻をたてねぬ荒日停々月
は白とて之俣の尻を分り凡止て秋の露
の尻下ト舟者の程は巻の尻を懸き
仲の口さへては海苔の持てわらざるの柄
巻をお取置て膝を引く之御得れは巻
加上又々月も出路り引りまを扱れれ
ん為つて挿糸の尻と付て柄を懸し
巻俣の尻初んまきく。○固青楓の
吹れまを使客の巻おはし御所ト挿糸
■ 親のつ子乃綱をひく 生
金糸白挿糸は懸る時を直ち下付と又又
後用を付たり親のつ子の尻を控りハ
入に促おとま申する親を大也より圍籠
てとる日まきん万巻束て又と直子付の糸

綱を懸おる麻はつ子なるは白凡^{「ヤミテ」}

まのつ子引て直ちく懸柄を控おく扱く

○因鈴張の扱山玉の扱を遠く

□ ちくばくと糸の扱柄は尻 生

金糸白生地の親のつ子懸きとさきく引上
る付と直ち下はあ用を付たりちくばくと
糸の扱柄の尻尻上肩玉俣をて上る糸の
つ子懸き俣を懸の言まきく引上る
扱丁の形は尻の川下いちまめの高上扱え
○固ちくばくと斜柄の人糸水玉扱糸
く扱糸挿糸圍籠巻をの俣とて扱糸
束の付糸後白巻は白本往束あす

■ 月黒糸乃連のねちやく 生

金糸白ちくばくと柄は糸の扱柄の尻は下
り尻は尻柄とえちん合ぬなを付たり
扱き糸上扱糸川言は白とん合ぬ乃連の

位業と松葉あむむり月悪の山家日と侍
わくた後きぬお正で一杯さうとお後ま
るま後進と^⑤僻野といは方い後雨の近
店そちよろくと^⑥立飲てまると彼方て
松うぬ舟とく先くゆくと松まらん歌又
とり戻も松く〇固生僻のりッ戻は
する松は八換もゆ

□ 云まもも花の三月中時分 居
まおも月悪系社連のサッ下出又但更ト又
まあたをたさうまこももむの三月中時
まうはははまこのまおもむまて面白のま
まこつ合ぬうおてうの歌い喚も勝る
只わてまぬを種と後法でも出極悪底の
尻まき指く〇固花字あけいあらの鳴るは
但更トま子の又居る

■ 楊炭のちりを拂ふ去風 牛

秀白三月中時分半暖ある侍ト又ち花の
後用のたさうし松炭のちりを拂ふ去風ト
八極のお舎のまよ切炭使て後のもむむ
ま干るまえて暖あれいままも炭う度て
おとまると人あす指く△松炭はキ用れも
まい村は脚炭まうてまよ用もいま下
三のま方五のまよは次のまよにまき指おく

四

雪は松をれ口又まは松屋 杉風
▲雪の松は枝をれ口を動かむり止て毛松
フウウカトカモホエまきん地スルカサはん△
ハきとて下を結守ん地すはは清を
合る方余信は

■ 日のあるま乃春きま空 孤危
本句後歌おちのまま郎りる侍ト又ま
おらまをたさう日のあるまのまきま

去らぬぬ止て後外又しておぼる雪を
其の船だけを又てアゝの船晴れあけの
やらあも亦大高々と空の世のあそくる松
之〇固〇雪後の葉は後白成也

□ 下者を二舟後子打ぬて 菊

▲あ白赤きをききき日利又直千お
をけり下者を二舟後子打ぬて固
ふ稀子天乳として後人多く出て平葉す
る松片り〇圍不白い雪の松をりく
より松をきりきの玄妙教するは余わい
かる松を白と和するはあて方二文はお
才二いなきを白と和けるをきききき
なり其松をりくは日口をききき古白と和
よ下者を二舟後子打ぬては誠あそや
さる松をりく何そ後世の下者のまきき
よそむ松をりくは文協の意をわこ

□ 万とききき大久乃松 子冊

▲あ白下者を二舟後子打ぬて松は竹と又
直往束支をけり万ときき大久の松よそ
去の松系より列の通するをひくおそり
むとすりよ又後備通するはまききき
ひくよそ社会と美揚をてけあ松也

■ 万とあそくる松もききき月松 林り

▲あ白後し松の方とききて独を竹ト又直
其姿をけり万とあそくる松もききき
月松よそ松のまじの松をりくは
廣着板をて向風は袖をりくは
まききききききききききききき

□ 西葉をりくききききききききき

▲あ白病より万とあそくる松もききき
お眺て才む松をけり西葉川にて
島地よそ松をりくは松をりくは

おのさそるすおとろなるの出入は後世早の
形たよある振は人の家春のむくあし△お門
の形あれは夏そ門の窓ささるる

● 竹の皮方端は形る夏の束て ぶ葉
▲おるすの形おの毛にさそるは竹は干おる併
さるると又さそるをさそる竹の皮せつさよ
形る夏の束ては竹皮付さるる夏の形端の
形よさそるさえておれ社の皮せつさよ
倍はあむむと出す振△干おと竹皮とさ
あま□すへり固は二白さ

● 稲よ子のさするあむむく 風
▲おるす干たれは竹の皮せつさよ形る夏の
の束ては竹と又さそる子の形端をさそる
稲よ子のさするあむむくは干さそる竹
皮はむむくとさそるさえてけるて一程
万倍す竹皮もせつさよあむむと出す振

□ ちあそ者の一人も又ぬ浦の秋 ち
▲おるす通る人の一面の田眺てははぬ稲株
さそるは竹と又さそるは稲よの形をさそる
りちあそ者の一人も又ぬ浦の秋はあま
け方の形さそるてその内もちあそるさ
一程もあむむは後村はささるけは出て田
は振作まするささるけは稲よ子さする振さ
りつ実さあむむ後の村は稲の出束もさ
さそるもよんぬれる姓あむむささる浦す
とさける振△子のさする秋さそる替りり

● めつさよ風のそるさそる 利合
▲おるす舟よの人の振ささるさそるてさそる
浦と出守作ト又さそるはさそるの振をさそる
めつさよ風のそるさそるさそるさそるさ
笑いあむむとあめはさそるてゆりさそる
皆風引ささるておもろくさそるぬけさ

あまをうつこと作らるる也

● 雲の月をかきわけて接大工 依々
 ▲ 雲のめつこまを風を吹きし作し又雲降
 笛人を付たり方々の月をかきわけて接
 大工ハ云々一行するはるま忘るる我は
 くわんておれさるやう春中さるん旅か
 と毎夜おき子の旅衣をくたれまんあ

□ 宵中へ登る子をかくるる

▲ 雲の青の月を洗て散らして旅大工ト又云
 身重の情を迷さる七中へ登る子をかくる
 うらハ内のはが丁といはれん春登すと月
 さす極は宿の子おせわて毎夜く我
 子の咄する旅と固々まもるる

● 茶菫のきまろく上まむちうて

▲ 雲の母の降るる正子の束てあつて作ト
 又云茶菫の用を付たり茶菫のさそろく上

よむおてハ勝子門よみ茶干てかき
 捜すよむおあつ束てむらまをるる子
 のちりちりし、旅と固れり

○ 川うら遊よ小あせりする

▲ 雲の母のむの下ま干る茶菫ト又云川
 の用を付たり川うら遊よ小あせりするハ
 又云のあせむの降るる作る旅吉舟の
 川ゆあつむ

● 船を鳴てきみよき雄の声

▲ 雲の川う遊まワム上あ西まき日ト又
 云天を付たり船を鳴てきみよき雄
 の声ト向山あつ川とさるるあせり
 船きくと名のお鳴てきみよき雄
 と雄雄あせりあ日よき船ぬお

□ せどく口をわらむく水

▲ 雲の日和よあれは榮はせむとあつらるる

の足裡く十分は降るせむ五俵之俵で
是いせしと此寸拵く△字字家報之の
汲次は俗語の汲之固し

■ ワギンくマヤて葉代のれ 依

▲ある積米を俵に斗込て拵束を俵に
立文取を付たり葉代は俵米をせむと
中々取又の末に内より人を取りれを
と拵て拵束を是く積て是又上
の葉代取の葉代下されと医沙の内文
の葉代拵立の人情を是く

□ 両舟でもいと自勝まはし ホ

▲ある船にワめて葉代は下されおは懸
ぬは初上之度之を付たり両舟で子
くえと自勝まはしは舟拵束の床
の五地又ては両舟ははるんくとやれ
いふ所ら是いま舟の交う拵束を

葉代はやると舟内は正之の両舟は
さく拵束を下されを是は表はしと
のちや是も両舟であく世は両舟は
まんと自勝する船之合後葉代は
とも懸て舟拵束の初と記情で拵
人を二舟の舟は合しあまや葉代は
両舟の拵束を引張てナト作ら全麻
あむ○固書と又て葉代は片は
舟と又換りあく古葉代はの白あま

■ 備へりて大をなて来る せ

▲あるおきあは余自自勝を是く俵
又立又用を付たり隣へりて大をな
大古乃くやの店先之笑人自自勝の古
又せ是コレは是もこの大をなと大合
隣へり拵之固乃く店先

□ 又乃く佛の級で拵は 是

▲あつ隣の大を愛ふ大を焚ぬ体ト又之
 又人を分たり又及も仏の版で信あむ人
 裡信を子む独信之新版焚めて出連
 せおと隣を焚為焚て素を佛しよ
 上へ佛版して仕と信の托解のり先そ悔れ
 救のく焼く又りししの信之○信と信トテハ
 食後は大を愛ふ信すておれ信あむト
 改くあむハコラムハ自白もあむコラフル
 テアラウハ信もあれお信信固す

□ 換えたりしてかお教あり 風
 ▲あむ又及も仏の版で信あむ余は
 の信と又信を信せたり換えたりて切去
 白ありよあのお男いさるん勅定家は何も
 利發教は信せらちと報設せむおと者の
 言の抜目信何ぞも換えたりと信を信
 之信換えたりよ信の言いせぬ信換の信ト

もく換一節の信くるよある信○固お信信
 之信後信信

■ 大板の人よすれるその月 合
 ▲あむ換えたりしてモア信教新件 上板
 信三信ハ信と又信お舎の人情せたり大板
 のモノ人よすれ信の月よ舟向信子
 らむよ人すれてその月のお信きとく大換
 して大信お教して又人をたしてたつくワイ
 と信の信の信と又信を信して船改信の
 信しあめくく信信之○固月と又て又信
 信ハ信信

□ 信を止れも祖母の信ある 也
 ▲あむ大板の人よすれるモハ信の月三信信
 信信信信と又信入信信信信信信信信
 也祖母の信よるよ大板も田舎く欠信
 て信信信の信信信信信信信信信信信

何れ守と標はかたはれいぢふりあるまふ二三
幸抱せよと申なれ田長と目よおえせ
中も飲されいぢのきらじの打寄り抱
固欠入る卒片より ○固とせれえ上ル
ハ此れいぢ候ふは字後らじ

□ 標はぬの所あの前凡くり サン
▲あ白林子房とすてちくの亮子件ト又立子信
の指をけり 標はるる所あの前凡くりハ
初より夫之村宝男の仏櫃の標ぬきよ唇れ
ふらよそあをを比林子房とすてちくを杜丹候ま
しこは止てり合う候るとちくの亮いイヤ
私を標はるる凡手運うるとい仏殿と口り
でモウ凡くりて余流あられい合えちす
と号ふ指也 ○ぬるハハは方より固退は去
は九等より只候也

■ 次乃小初をて懐むする声 は

▲あ白凡仏候あちく知件あは生あ物候
扉来亦下よさむけよ又立更は持ての故悩
をけり次の小初やを懐むする声ハ秋き
高家の仏房の候あふ小た者よは言者伯
てくるは標返り候くを業せちき信よ更
て着候するまの今のさむけすて又思て
むせふのとちくと声ひそめて抱くるは生
殺と西木村の邪まぬいあき莫る也 ○固
朋孝の突候る高家の指は自他遠也

□ 約束まをてを訓ははそれ 一ウ
▲あ白次の部をてむせは妹まのくと意初や
くあする件ト又立余仏の言をむ信を迷さ
り約束まかみてきりて枝まをれよ男初を
の次の助初を思て下女まの人の原き信
は懐つくを袖は思ある者すて意いお互
しよ隠さ守とけ枝をてはげもようあまを

高深なる事と云ふ程に○を^{ツカ}わら^カよ^カ云
は作てらあはよけ^カを^カて^カ改^カて^カ

■ 七ツの徳は如き悔ふ来り
△あむ約束する雇人のとく宛時刻まるる
板より介体上立待得^カ格^カを^カたり
七のうまは如き悔ふ来りハ肘^カを^カて^カハツ
宛板^カを^カて^カ待^カたりハ術^カの^カ七^カの^カあり
と板^カを^カ悔^カふ来りハ^カと^カ板^カを^カて^カ
中^カに^カ△あむの^カ板^カに^カ推^カされ^カい^カま^カを^カて^カ
よ^カそれ^カ人^カを^カたり^カ○固^カ小^カ宿^カの^カ斤^カ兩^カ
板^カを^カ格^カを^カ字^カの^カ改^カて^カ

■ 花の両年さち^カは^カ隆^カ出^カて^カリ
△あむ来り^カは^カウ^カを^カ眺^カむ^カ向^カく^カ正^カに^カ悔^カふ^カ
房^カの^カ体^カ上^カ立^カて^カむ^カ人の^カ格^カを^カたり^カむ^カ又^カの^カめ
ま^カは^カウ^カを^カて^カい^カ候^カ事^カの^カめ^カを^カて^カま^カち^カの^カか^カ格^カ
い^カみ^カを^カ桶^カや^カ出^カる^カ度^カを^カぬ^カる^カい^カあ^カん^カべ^カり

しきあ^カう^カ迎^カ撃^カや^カす^カい^カあ^カう^カと^カお^カ後^カす^カ
を^カイ^カや^カく^カら^カい^カあ^カう^カま^カん^カと^カせ^カて^カい^カん^カ年^カふ^カ
ち^カち^カし^カと^カ隆^カ出^カす^カ向^カ乃^カを^カ息^カを^カさ^カ度^カ来^カ
丁^カ推^カて^カし^カレ^カヤ^カテ^カを^カ出^カる^カ悔^カふ^カ来^カる^カワ^カと
急^カ用^カ急^カす^カ格^カの^カ運^カ行^カを^カ固^カて^カ

■ 田力又^カは^カ格^カ菜^カ格^カふ^カる^カ 水
△あむむの^カ隆^カを^カ年^カさ^カち^カ隆^カれ^カい^カあ^カを^カて^カ
胸^カの^カ体^カ上^カ立^カて^カ用^カを^カたり^カ男^カ交^カは^カ格^カ
菜^カ格^カる^カト^カ人^カ格^カの^カ蓋^カ格^カは^カ連^カ立^カり^カ隆^カ出^カ
あれ^カい^カ子^カ隆^カむ^カと^カ格^カ格^カき^カ女^カの^カち^カあ^カす^カう^カ
ち^カあ^カは^カあ^カひ^カれ^カ格^カ交^カは^カま^カう^カ込^カめ^カて^カみ^カを^カ
あ^カて^カ格^カり^カあ^カく^カ隆^カる^カ二^カ反^カを^カる^カい^カぬ^カあ
を^カと^カあ^カ格^カ△^カは^カ格^カ初^カあ^カう^カも^カ後^カお^カ力^カあ
り^カ格^カも^カあ^カう^カ格^カ出^カ菜^カ格^カ中^カの^カ格^カあ^カし

炭俵往終

